兵庫県文化財調査報告　第307冊

姫路市

# 岩　端　町　遺　跡

－処遇管理棟・庁舎棟等新営工事に伴う発掘調査－

2006年3月

兵庫県教育委員会

姫路市

# 岩端町遺跡

（いわばなちょう）

－処遇管理棟・庁舎棟等新営工事に伴う発掘調査－

2006年3月

兵庫県教育委員会

# 例　言

1．本書は、姫路市岩端町438に所在する岩端町遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は所内施設の新営工事に先立つもので、共に姫路少年刑務所からの委託を受け、兵庫県教育委員会が平成12年度･14年度･15年度に確認調査を、平成12年度･15年度に本発掘調査を実施した。

　調査は、第１次調査を兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所山田清朝が、第２次調査を同山本三郎・岸本一宏が担当した。

3．調査後の空中写真の撮影は、第１次調査・第２次調査とも株式会社　大設に委託して行った。他の遺構の写真撮影・実測は調査員が実施した。

4．整理作業は、平成17年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。

5．遺物の接合・実測・復元・トレースについては、上記事務所整理保存班で行った。

6．遺物写真の撮影は、株式会社　アコードに委託し、平成17年度に行った。

7．調査は、三角点をもとに三級基準点を設置しておこなった。なお、調査地は第Ｖ系に位置する。

　なお、第１次調査では旧測地系に基づいて測量を行ったが、本報告では、国土地理院が公開するプログラム「ＴＫＹ２ＪＧＤ」により、世界測地系への変換をおこなっている。経緯度についても同様である。このため、第１次調査・第２次調査の成果は、ともに世界測地系で統一している。

8．本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

9．本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。

10．本書の編集は八木和子の補助を得て山田が行い、山本と山田が執筆した。

11．本報告にかかわる遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。

# 目　　次

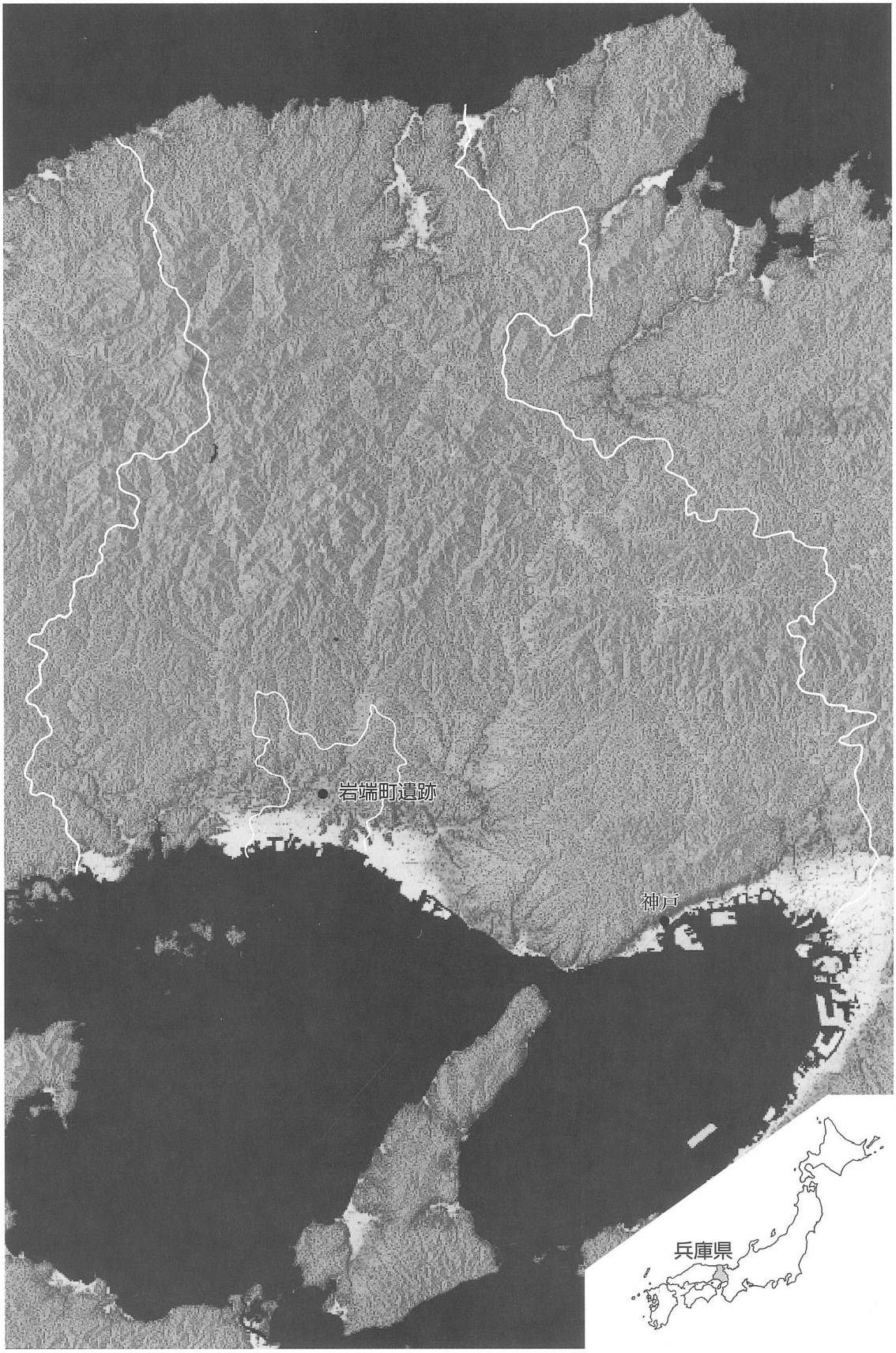
第１章　岩端町遺遺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　　1．地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　　2．歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第２節　調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　1．確認調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　2．本発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　　3．整理作業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第２章　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第１節　第１次調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第２節　第２次調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　第３章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

# 挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置Ⅰ・・・・・・・・・・・・iii
第２図　遺跡の位置Ⅱ・・・・・・・・・・・・・1
第３図　遺跡周辺の地形環境・・・・・・・・2
第４図　明治40年　遺跡周辺地形図・・・・3
第５図　明治34年　遺跡周辺市街図・・・・4
第６図　主要周辺遺跡・・・・・・・・・・・5
第７図　姫路少年刑務所と確認調査・・・・・7
第８図　第３次確認調査・・・・・・・・・・8
第９図　調査位置図・・・・・・・・・・・・・9
第10図　第１次調査・・・・・・・・・・・・9
第11図　完成直前の庁舎棟・・・・・・・・10
第12図　第１次調査基本土層図・・・・・・11
第13図　第１次調査平面図・・・・・・・・12
第14図　掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・13
第15図　SB01・・・・・・・・・・・・・・14
第16図　SB02・・・・・・・・・・・・・・15
第17図　SB03・・・・・・・・・・・・・・16
第18図　SB04・・・・・・・・・・・・・・17
第19図　SB05・・・・・・・・・・・・・・18
第20図　SK01・・・・・・・・・・・・・・19
第21図　SK02・・・・・・・・・・・・・・・19
第22図　SK03・・・・・・・・・・・・・・・20
第23図　SD03・・・・・・・・・・・・・・・21
第24図　SD04・・・・・・・・・・・・・・・21
第25図　出土石器・・・・・・・・・・・・・22
第26図　第１次調査出土土器・・・・・・・22
第27図　土層断面図・・・・・・・・・・・・23
第28図　第２次調査平面図・・・・・・・・24
第29図　SD01・・・・・・・・・・・・・・・25
第30図　SD01出土土器・・・・・・・・・・26
第31図　SD03・・・・・・・・・・・・・・・27
第32図　SB01・・・・・・・・・・・・・・・27
第33図　SK01・・・・・・・・・・・・・・・28
第34図　SK02・・・・・・・・・・・・・・・29
第35図　SK03・・・・・・・・・・・・・・・29
第36図　SK04・・・・・・・・・・・・・・・29
第37図　SK05とSD01・・・・・・・・・・・30
第38図　遺構の変遷（1）・・・・・・・・・31
第39図　遺構の変遷（2）・・・・・・・・・32

# 写真図版目次


写真図版１　岩端町遺跡
　米軍空中写真
写真図版２　岩端町遺跡
　遺跡遠景　南上空から
　遺跡遠景　北東上空から
写真図版３　第１次調査
　全景　北東上空から
　全景　北西上空から
写真図版４　第１次調査
　全景　真上から
写真図版５　第１次調査
　全景　南西から　　建物群　北西から
　建物群　北東から
写真図版６　第１次調査
　SB01　北東から　　SB01－Ｐ１　南から
　SB01－Ｐ２　南から　　SB01－Ｐ３　南から
　SB01－Ｐ４　南から　　SB01－Ｐ７　北から
　SB01－Ｐ８　北から
写真図版７　第１次調査
　SB02　北東から　　SB02-Ｐ２　北から
　SB02－Ｐ３　北から　　SB02－Ｐ４　北から
　SB03　南西から
写真図版８　第１次調査
　SB03－Ｐ１　北から　　SB03－Ｐ２　北から
　SB03－Ｐ７　南から　　SB04　北東から
　SB04－Ｐ２　北から　　SB04－Ｐ３　北から
　SB04－Ｐ５　南から　　SB04－Ｐ６　南から
　SB04－Ｐ７　南から
写真図版９　第１次調査
　SK03 断面　南西から
　SK03　土器出土状況　南西から
　SD02 断面　西から
写真図版１０　第２次調査
　全景　西上空から　　全景　北上空から
写真図版１１　第２次調査
　全景　真上から
写真図版１２　第２次調査
　東側の遺構　南から
　SD01 ～ SD03　東から
写真図版１３　第２次調査
　SD01・SD02　東から
　SD01 遺物出土状態　北西から
写真図版１４　第２次調査
　SB01　西から　　土坑群と溝　北から
写真図版１５　第２次調査
　SD01 土層断面　北西から
　SD01 と SK05 の土層断面　南から
　SD03 土層断面　南から
写真図版１６　第２次調査
　SK01 土層断面　南から
　SK03 土層断面　東から
　SK04 土層断面　北から
写真図版１７　第２次調査
　SD01 と SK05 の関係　西から
　南西壁土層断面　北から
写真図版１８　出土遺物
　SB02 出土土器（１・２・６）
　SB03 出土土器（４・５・７）
　SD02 出土土器（８）
　第１次調査包含層出土土器（３）
写真図版１９　出土遺物
　SK03 出土土器（９）
　第２次調査 SD01 出土土器（10 ～ 15）
　第１次調査出土石器




第１図　遺跡の位置Ⅰ

# 第１章　岩端町遺跡

## 第１節　遺跡の環境

### １．地理的環境

姫路市

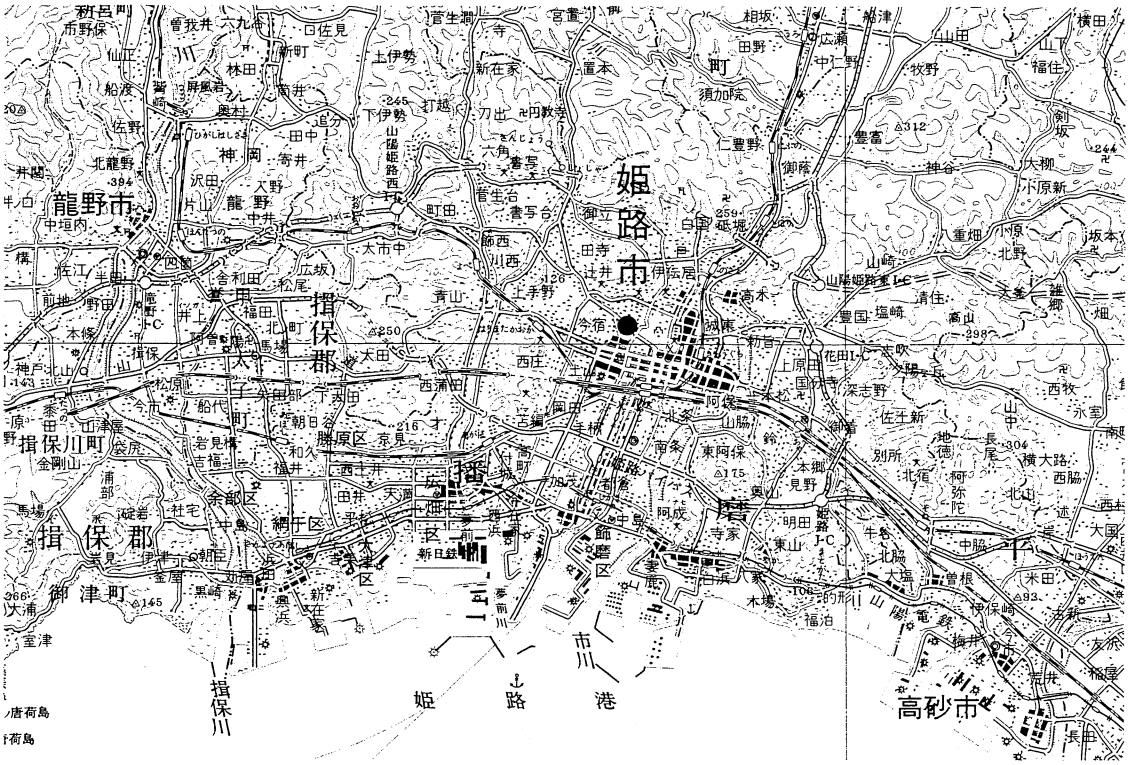
岩端町遺跡の所在する姫路市は、律令期には「播磨の市」を中心として、江戸時代以降は姫路城を中心とした城下町として栄えてきた町である。明治22年に市制が施行され、平成17年11月現在、人口約48万人、面積274.57㎢の規模をほこる。当地は、城下町としてばかりではなく、古代以来畿内と西国を結ぶ山陽道が通り、さらには日本側と瀬戸内海側を結ぶルートの起点でもあったように、交通の要衝でもあった。

このため、兵庫県南西部、播磨地方における中核をなす都市に発展し、平成８年には中核都市に指定されている。なお、本書が刊行される平成18年３月には、平成の大合併により、飾磨郡家島町・夢前町と宍粟郡安富町及び神崎郡香寺町が合併する予定である。

姫路市は、姫路平野を中心に展開している。この姫路平野は、市川とその支流の船場川により形成された平野である。姫路平野の縁辺部には独立丘陵が存在し、平地との差が際立っている。この独立丘陵に近接した平地に立地するのが岩端町遺跡である（第３図）。

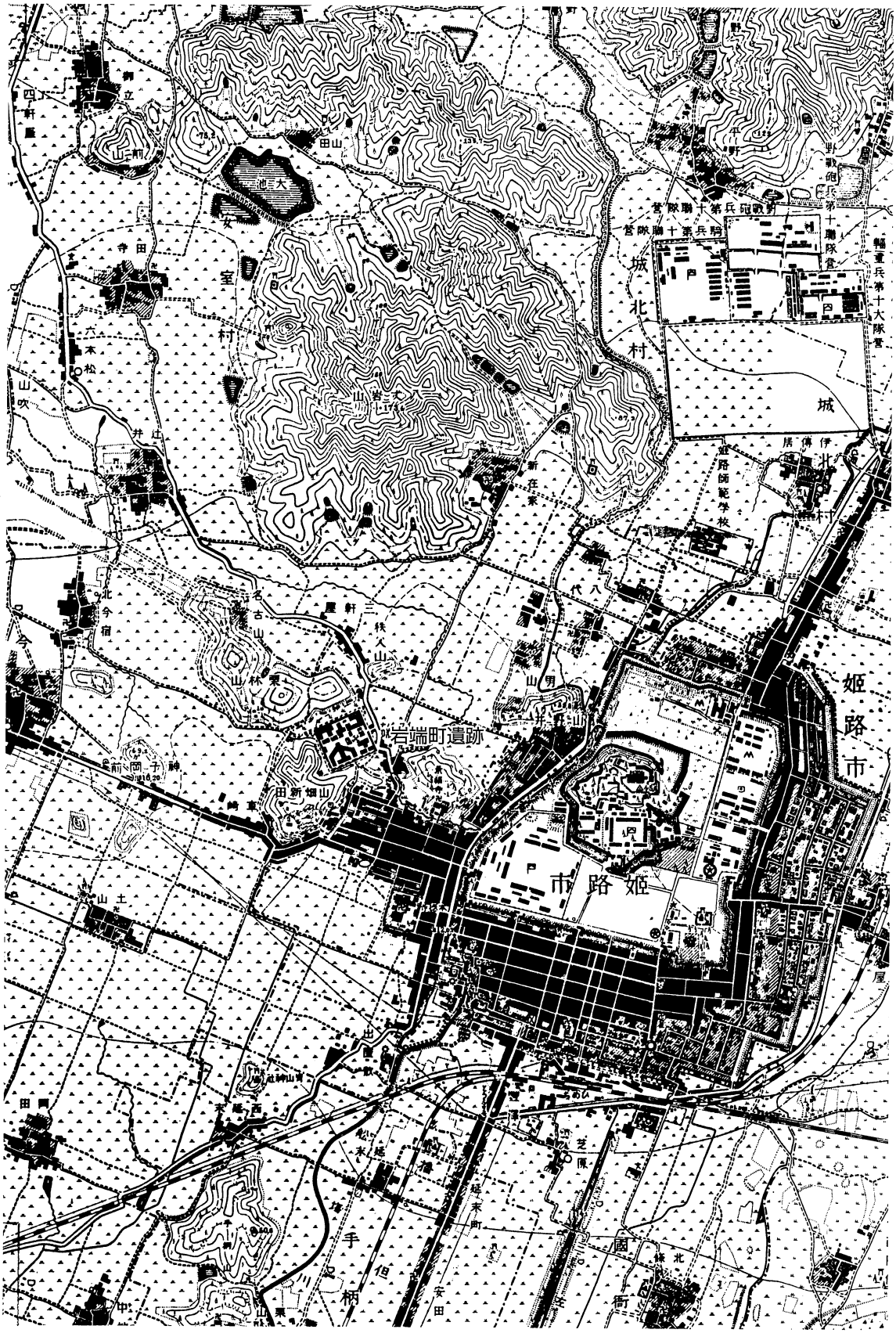
岩端町遺跡

岩端町遺跡は姫路平野の中央西側、名古山丘陵の東側に位置する。また、世界文化遺産に登録された国宝姫路城の西約1.20kmに位置する。埋立地を除いた海岸からの距離は、直線で約6.2kmを測る。調査地の現地表面における標高は、15.20～15.40ｍである。



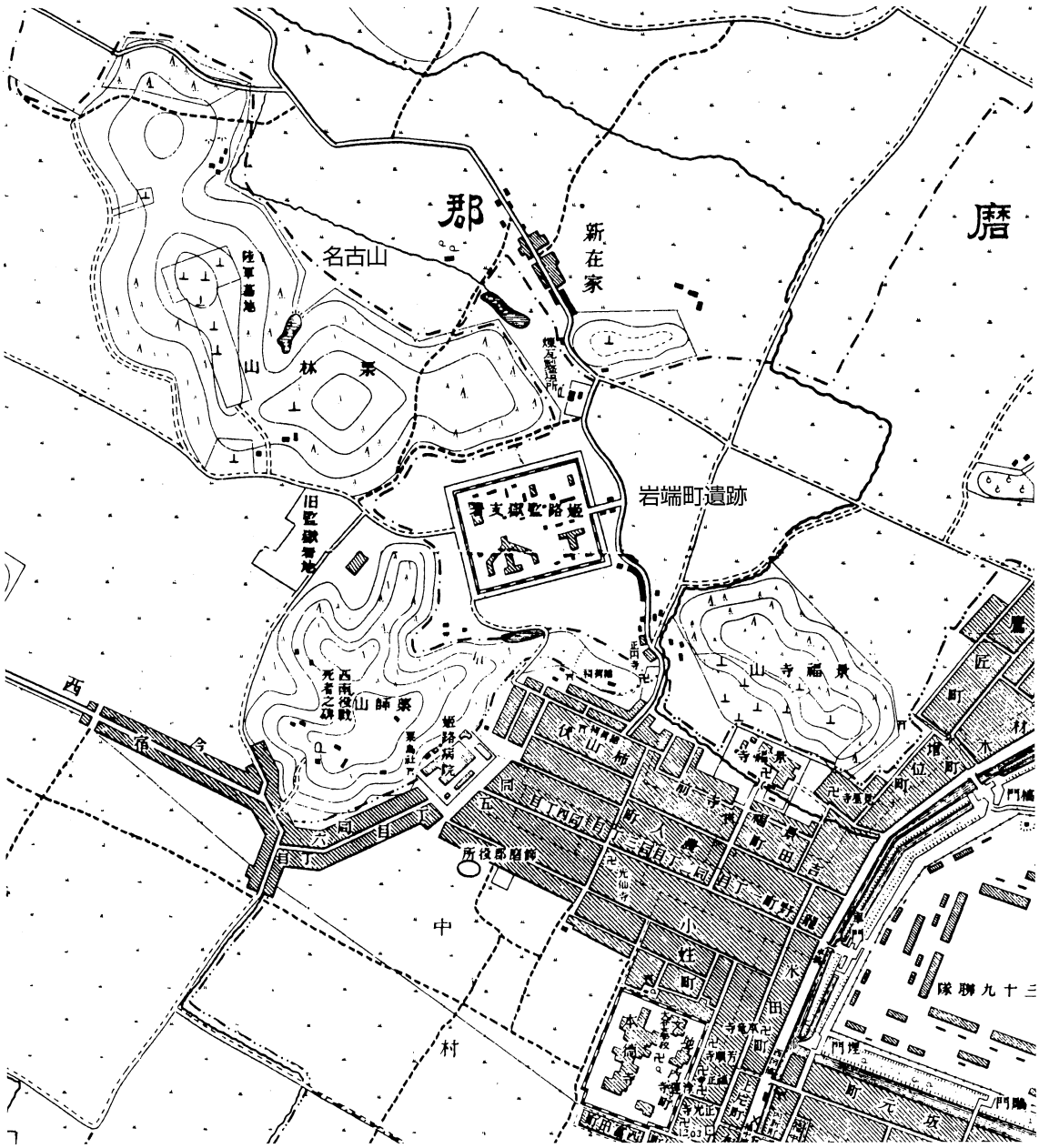

第２図　遺跡の位置Ⅱ

第３図　遺跡周辺の地形環境




第４図　明治 40 年　遺跡周辺地形図

姫路少年刑務所　当遺跡の大半は、姫路少年刑務所として利用されている。その敷地面積は 44363 ㎡を測る。当刑務所の歴史は、明治 31 年に当時飾磨郡高岡村にあった兵庫県姫路監獄支所が移




第５図　明治 34 年　遺跡周辺市街図

転してきたことに始まる。その後、神戸刑務所姫路支所（大正 11 年）を経て、昭和２年から現在の姫路少年刑務所となっている。この間、昭和 20 年には空襲を受け、建物の大半を焼失している。このように、明治時代以来広大な面積を刑務所として当地が利用されてきたため、当地の地形を復元することは困難である。

**遺跡の立地**

ただし、明治 40 年陸地測量部作成の地形図（第４図）をみると、当刑務所の周囲の地目は水田となっている。また、明治 34 年第十師団司令部発行の姫路市街図（第５図）によると、刑務所は丘陵部を開発したものではなく、平地に建設されたものと読み取ることができる[(1)]。これを裏付けるように、調査による土層観察では、基盤層の層相が沖積地の特徴を示している。

以上から、岩端町遺跡の基盤層は、市川もしくはその支流の堆積作用に起因する可能性が高いものと判断される。よって、岩端町遺跡は沖積地に立地するものと考えられる。

## ２．歴史的環境

岩端町遺跡周辺には多くの遺跡が周知されている。後述するように、岩端町遺跡は弥生時代中期を中心とした遺跡である。そこで、調査が行われた弥生時代の遺跡を中心に概観する（第６図）。

1. 岩端町遺跡（020572）
2. 名古山遺跡（020164）
3. 山吹遺跡（020160）
4. 辻井遺跡（020162）
5. 大谷口遺跡（020162）
6. 山崎山古墳群（020859～65）
7. 八代山古墳群（020173～78）
8. 八代深田遺跡（020166）
9. 姫路城跡・姫路城城下町跡（020168・69）
10. 今宿丁田遺跡（020165）
11. 土山遺跡（020452）
12. 八反長遺跡（020446）
13. 千代田遺跡（020453）
14. 南畝町遺跡（02046）
15. 豆腐町遺跡（010459）
16. 仮称　姫路駅周辺遺第4地点（020464）
17. 仮称　姫路駅周辺遺第1地点（020460）
18. 仮称　姫路駅周辺遺第2地点（020461）

（　）内は遺跡番号

第６図　主要周辺遺跡

当該期の遺跡としては、名古山遺跡（２）・辻井遺跡（４）・八代深田遺跡（８）・豆腐町遺跡（15)・仮称　姫路駅周辺第１地点遺跡（17)・仮称　姫路駅周辺第２地点遺跡（18)・今宿丁田遺跡（10）などが、発掘調査によりその内容が明らかとなっている。

**名古山遺跡**　当遺跡の北西側の栗林山と名古山に挟まれた北側鞍部に立地する遺跡である。弥生時代中期後半の竪穴住居跡が３棟確認され、そのなかの１棟が完掘されている。この結果、完掘した住居跡から銅鐸の笵型片が出土し、大変注目されている。[2]

**辻井遺跡**　当遺跡の北西側、名古山のさらに北西側の沖積地に立地する遺跡である。弥生時代に関しては、前期の土器が出土している。

**八代深田遺跡**　当遺跡の北東約 500 mに位置する遺跡である。弥生時代中期後半および弥生時代後期～古墳時代前期の土器がまとまって出土している。当遺跡を考える上で、重要な位置をしめる遺跡である。[3]

**豆腐町遺跡**　JR 姫路駅構内に位置する遺跡である。兵庫県教育委員会の調査により、弥生時代前期の溝、弥生時代終末期の土坑群が明らかとなっている。[4]

**第１地点遺跡**　姫路駅周辺土地区画整理事業に伴い、姫路市教育委員会によって調査がおこなわれている。調査の結果、弥生時代前期の溝・土坑、弥生時代中期後半の土器溜りなどが検出されている。[5] また平成８年度に、同遺跡を、兵庫県教育委員会が北条遺跡として調査を実施し、弥生時代前期の旧河道・弥生時代後期の竪穴住居跡・古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されている。[6]

**第２地点遺跡**　第１地点遺跡同様、姫路駅周辺土地区画整理事業に伴い、姫路市教育委員会により調査がおこなわれている。調査の結果、弥生時代中期後半の竪穴住居跡・土坑・溝・土器溜りなどが検出されている。[7]

**今宿丁田遺跡**　1980 年に調査がおこなわれ、扁平鈕式段階の銅鐸鋳型が出土している。同じ層から出土した土器から、第Ⅳ様式併行期に位置付けられている。名古山遺跡とともにほぼ同時期に位置付けられる遺跡で、岩端町遺跡との関係で注目される。[8]

〔註〕

（１）姫路市『姫路市史　第十二巻　付図』1989

（２）上田哲也・河原隆彦『播磨の弥生文化』1966

（３）山本博利・秋枝　芳『八代深田遺跡－姫路市八代字深田－』姫路市教育委員会　1977

（４）兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『豆腐町遺跡　現地説明会資料』2001

（５）秋枝　芳「北条遺跡（第１次調査)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ 平成８年度（1996）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　1998

（６）山田清朝「北条遺跡」『平成８年度　年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1997

（７）秋枝　芳「(仮称) 姫路駅周辺第２地点遺跡（第１次調査)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ 平成７年度（1995）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　1997

（８）山本三郎「国内における青銅器鎔笵とその遺跡　近畿１－兵庫」『シンポジウム　青銅器の生産　終末期古墳の諸問題』日本考古学協会編　1989

## 第２節　調査の経緯

はじめに　姫路少年刑務所は、所内施設の新営工事に伴い、４次にわたる確認調査（第１次確認調査～第４次確認調査）を実施した（第７図）。この結果、第１次確認調査と第３次確認調査で、埋蔵文化財の包蔵が明らかとなり、本発掘調査を実施することとなった。これが、第１次調査と第２次調査である。そして、この２次におよぶ本発掘調査の成果をまとめたのが、本報告書である。各調査の概要は以下のとおりである。

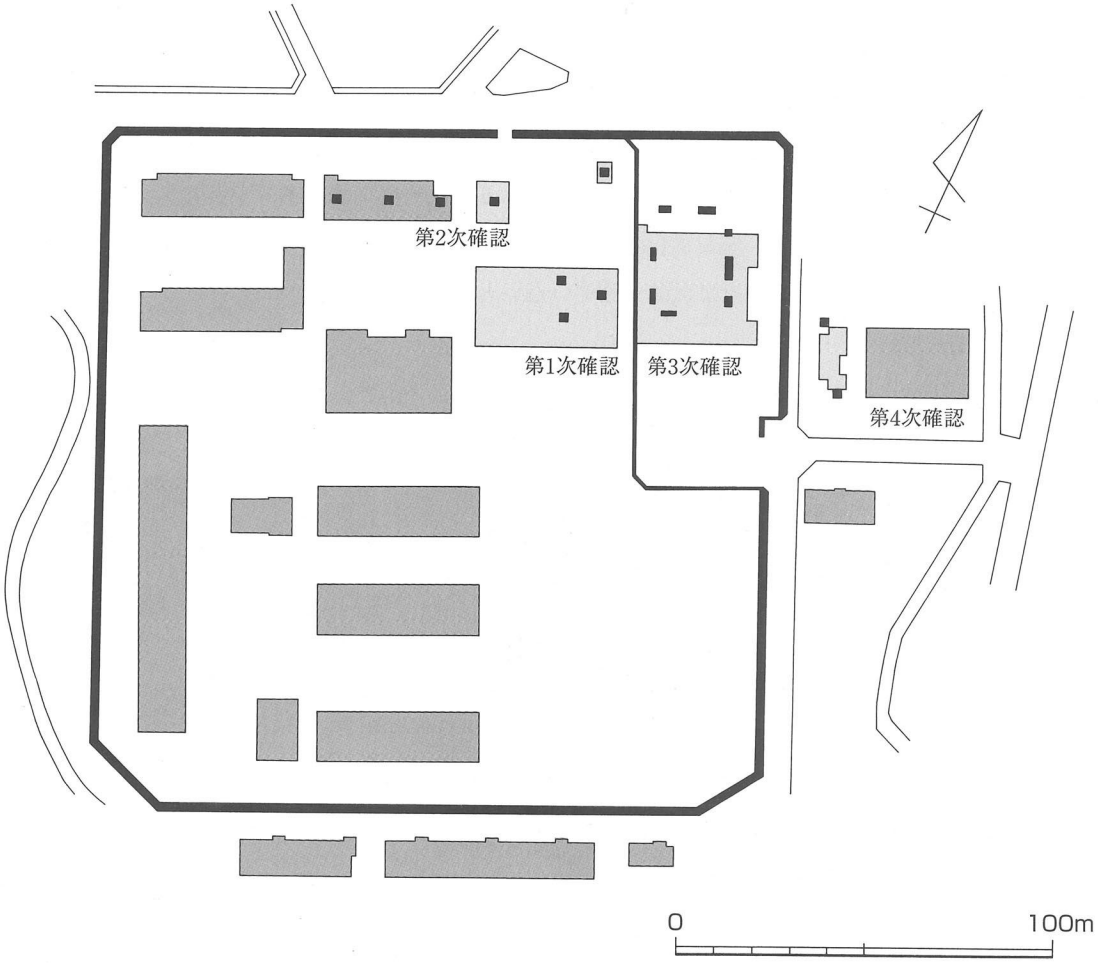
### １．確認調査

第１次確認調査　処遇管理棟新営工事に伴う確認調査である。３箇所にグリッドを設定し、埋蔵文化財の有無について、調査をおこなった。この結果、弥生時代後期の柱穴と溝状遺構が明らかとなり、事業予定地内には埋蔵文化財が包蔵されているとの判断に至った。

遺跡調査番号　990298

調査時期　平成 12 年 1 月 25 日

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　高瀬一嘉




第７図　姫路少年刑務所と確認調査

第２次確認調査　医務棟・出所準備室棟・霊安室の新営工事に伴う確認調査である。第１次調査を実施した地区の北東側から北側にかけての一帯を対象とした。第１次調査の結果、当事業予定地まで埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高くなったため、確認調査を実施したものである。５箇所にグリッドを設定し、埋蔵文化財の有無についての確認をおこなった。

調査の結果、一部のトレンチで土器の出土が認められた以外は、遺構等を確認することはできなかった。このため、当地には埋蔵文化財の包蔵は認められないものと判断するに至った。

遺跡調査番号　2000278

調査時期　平成14年５月13日

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　山田清朝

第３次確認調査　庁舎棟等の新営工事に伴い行った調査である。第１次調査地の北東側にあたり、第１次調査で検出された遺構が当地まで拡がる可能性が考えられたため、確認調査を実施した。８箇所にグリッドを設定し、埋蔵文化財の有無についての確認を行った（第８図）。この結果、柱穴と溝状遺構が明らかとなり、事業予定地内には埋蔵文化財が包蔵されていることが明らかとなった。

遺跡調査番号　2002050

調査時期　平成14年５月13日

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　山田清朝

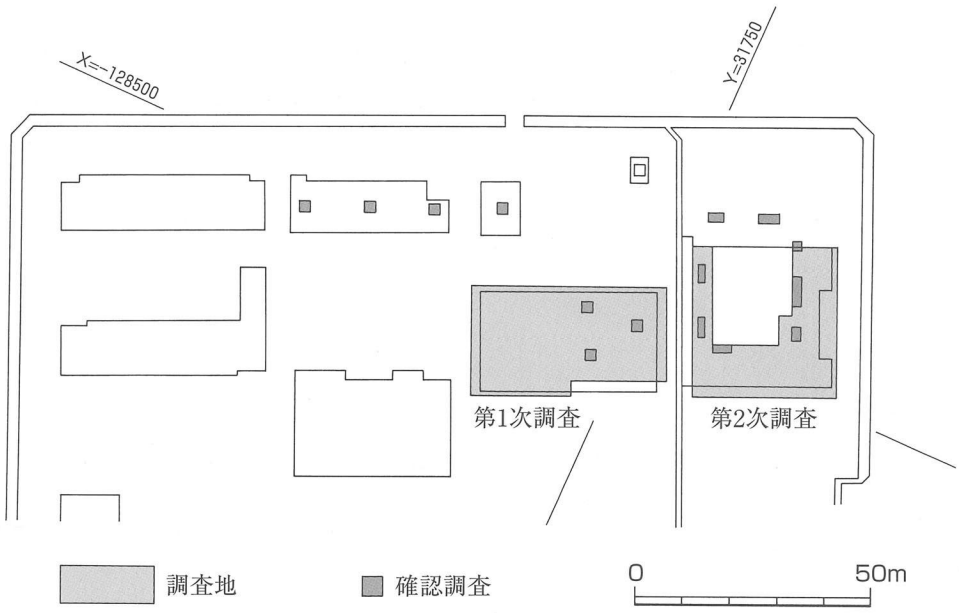
第４次確認調査　待機所の新営工事に伴い行った調査である。刑務所用地の最も東側にあたる。２箇所にグリッドを設定し、埋蔵文化財の有無についての確認をおこなった。遺構・遺物は全く認められず、埋蔵文化財は包蔵されていないとの判断に至った。

遺跡調査番号　2002237

調査時期　平成15年２月28日

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　甲斐昭光

第８図　第３次確認調査




第９図　調査位置図

## ２．本発掘調査

確認調査の結果に基づき、２次にわたる（第１次調査・第２次調査）本発掘調査を実施した（第９図）。また、第１次調査終了後の６月８日には、姫路少年刑務所庁舎内にて、出土遺物とパネルを中心に地元市民を対象とした説明会を開催した。各本発掘調査の概要は以下のとおりである。

第１次調査　第１次確認調査の結果に基づき実施された調査である。

遺跡調査番号　2000185

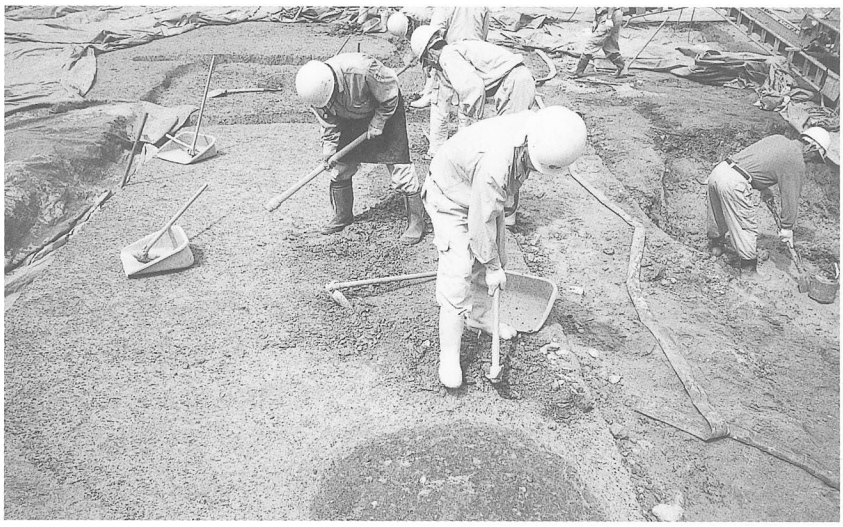
調査時期　平成12年５月９日～６月13日

調査面積　859 ㎡

調査体制　調 査 主 体　兵庫県教育委員会

調 査 担 当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　山田清朝

調査補助員　中谷悟史



第10図　第１次調査

**第２次調査**　第３次確認調査の結果に基づき実施された調査である。

**遺跡調査番号** 2003190

**調査時期**　平成 15 年 11 月 26 日～ 12 月 26 日

**調査面積**　617 ㎡

**調査体制**　調 査 主 体　兵庫県教育委員会

調 査 担 当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　山本三郎･岸本一宏

調査補助員　清水洋子

## ３．整理作業

平成 17 年度の１箇年で、出土土器の接合･実測･復元･写真撮影、遺構図･実測図の整図･レイアウト・トレース、編集作業をおこなった。整理体制は、以下の通りである。

**整理担当職員** 整理保存班　森内秀造

調　査　班　山本三郎・山田清朝

**嘱　託　員**　八木和子・吉田優子・垣本明美・河上智晴

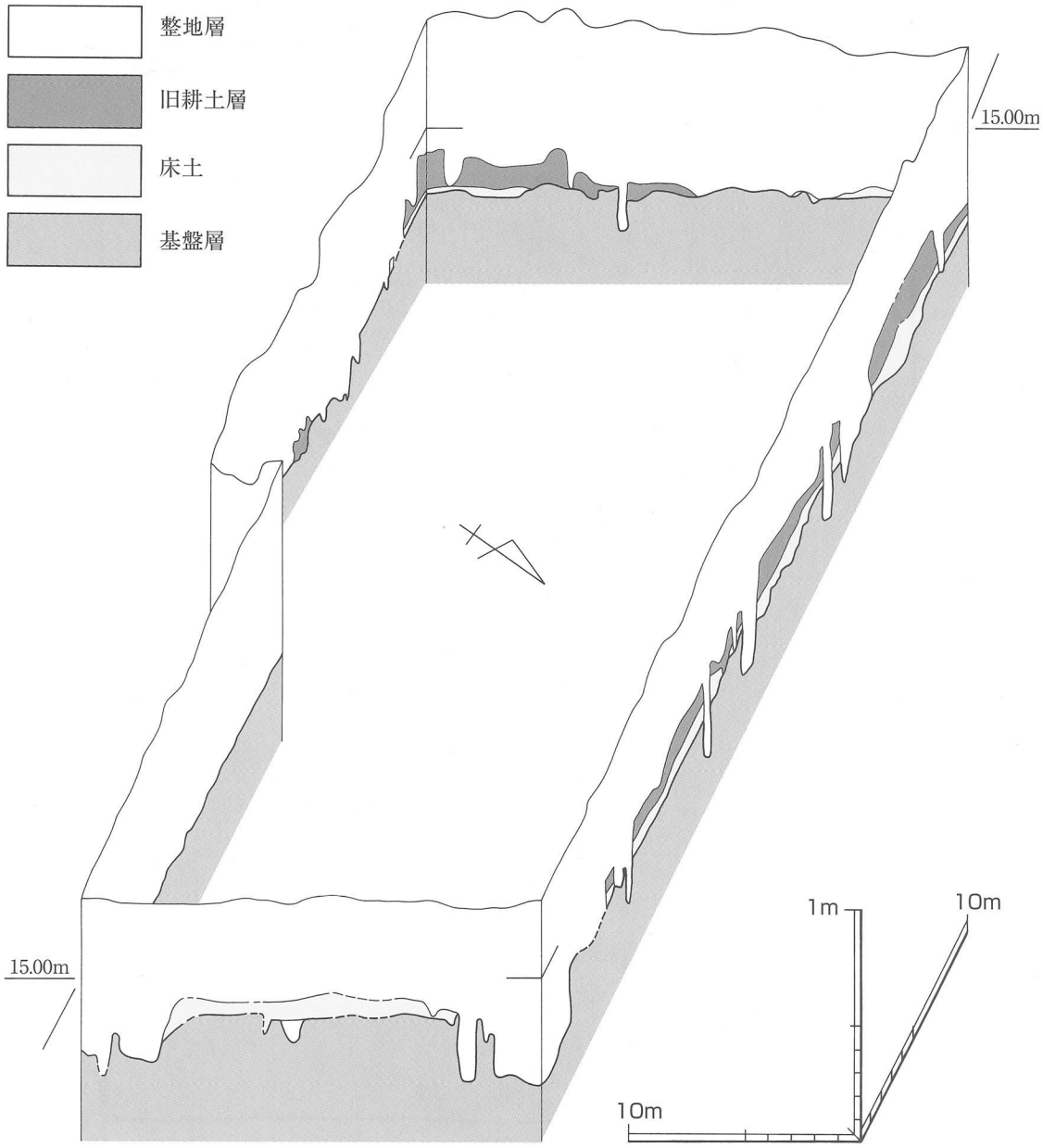
第 11 図　完成直前の庁舎棟

# 第２章　調査の成果

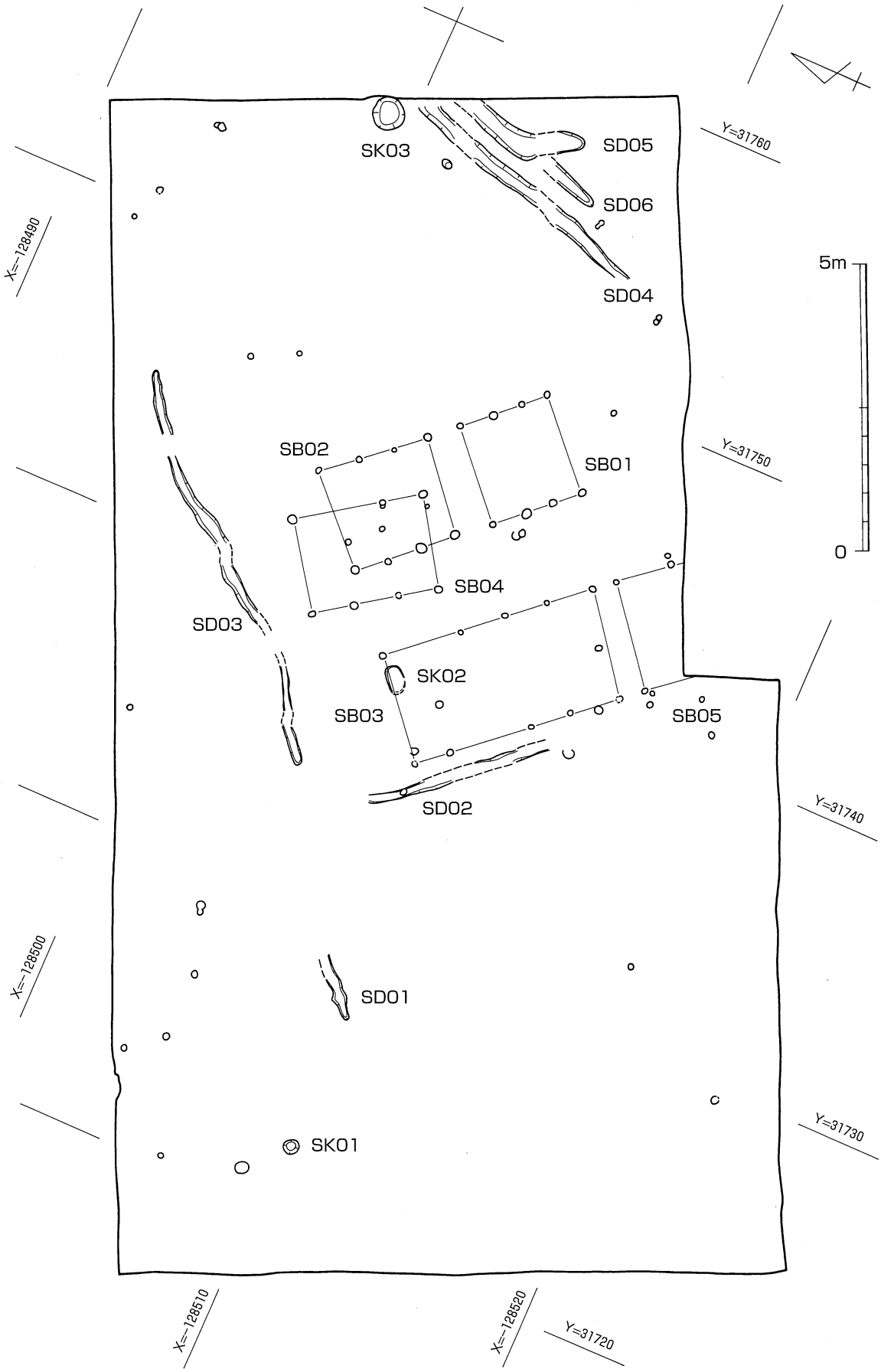
## 第１節　第１次調査

### １．概要

調査地は、以前処遇管理棟が建てられていたところである。また、遺構検出面は、現地表面下約 40 cmの浅さである。このため、建物の基礎部分を中心にその影響が顕著で、遺構の検出は困難であった。この結果、遺構が検出できたのは、建物基礎の影響が及んでいない箇所に限られている。




第 12 図　第１次調査基本土層図




第13図　第１次調査平面図

## ２．基本土層と遺構の検出

基本土層

前項で報告したように、遺構面のレベルは、現地表面から40㎝にすぎない。このため、基本土層（第12図）そのものは比較的単純である。加えて、上層の多くは、建物建設およびその後の土地利用による整地・盛土層となっていた。この層のなかには、昭和20年に受けた空襲によると考えられる焼土層も認められた。その下層は、旧耕作土層･床土層･基盤層となっており、いわゆる遺物包含層は認められなかった。

基盤層は黄灰色シルト混じり極細砂～シルト質極細砂で、その層相から判断して、縄文海進以降に堆積した層と考えられる。このことから、当遺跡は、完新世段丘面上に立地するものと考えられる。また、基盤層の粒子を観察すると、東側のほうが粗く、東側からの堆積と判断される。また、南東部を中心に、縄文時代に形成された中州と考えられる礫層も部分的に認められた。

遺構の検出

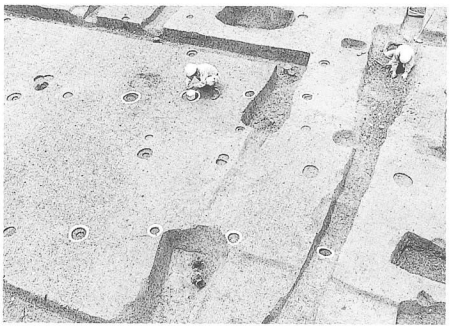
遺構面は１面のみである。基盤層上面で検出した。

## ３．遺構と遺物

掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝を検出した。検出した遺構は、調査面積と比較すると多くはなく、調査区中央部から北東側に集中する傾向が認められる。逆に、南西側ではほとんど検出されていない。また、遺物の出土も、遺構内外を問わずわずかである。

### （１）掘立柱建物跡

５棟(SB01 ～ SB05)検出した（第13図）。これらの建物は、調査区中央部に集中する傾向にある。ただし、SB02とSB04が平面的に重複するように、５棟の建物が同時に機能していたものではない。



第14図　掘立柱建物跡

#### SB01（写真図版６）

検出状況

調査区中央北東側で検出した（第13図)。調査区内で、建物全体が検出されている。SB02の東側に位置する。

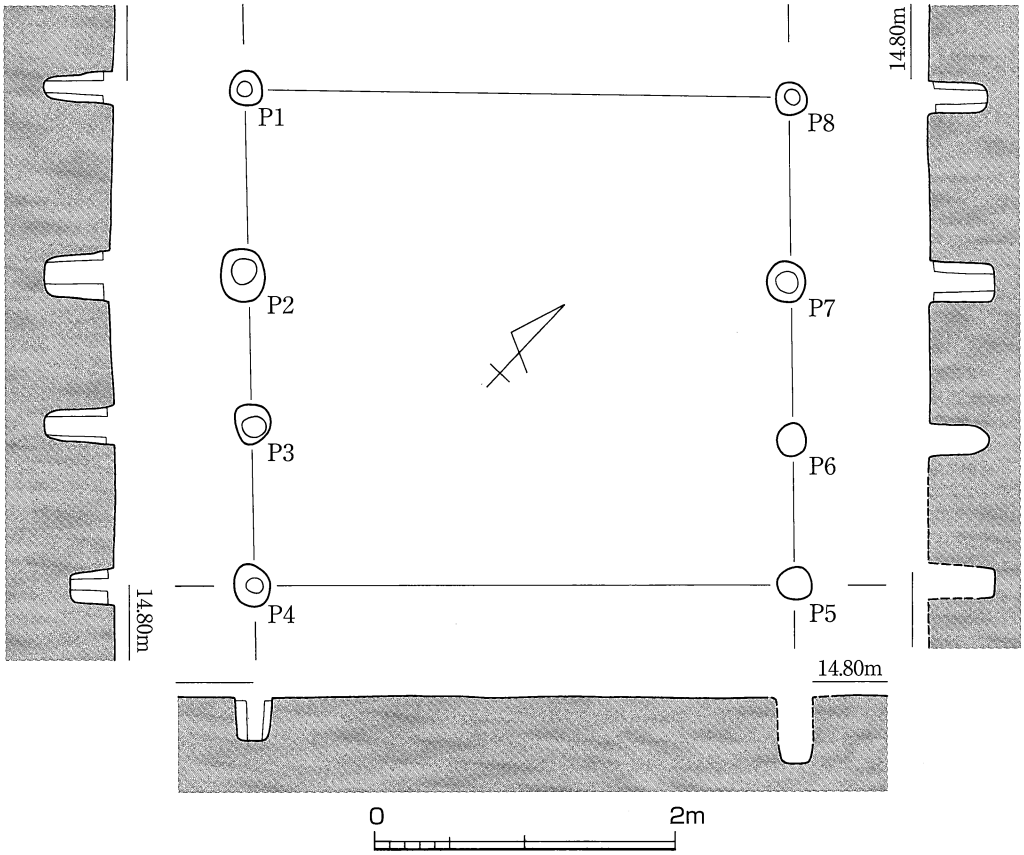
建物規模

梁行１間､桁行３間の側柱建物である（第15図)。各柱穴間の規模およびその平均値は、第１表の通りである。北東桁行を基準とした棟軸方向は、N 44°　0′　Wを示す。

第１表　ＳＢ01 柱穴・建物規模一覧表

| No | 掘方規模(cm) | 柱痕径(cm) | 深さ(cm) |
|---|---|---|---|
| Ｐ１ | 23.0 | 10.0 | 48.0 |
| Ｐ２ | 35.0 | 17.0 | 45.0 |
| Ｐ３ | 26.0 | 13.0 | 47.0 |
| Ｐ４ | 28.0 | 10.0 | 30.0 |
| Ｐ５ | 23.0 | | (44.0) |
| Ｐ６ | 22.0 | | (39.0) |
| Ｐ７ | 28.0 | 14.0 | 43.0 |
| Ｐ８ | 23.0 | 10.0 | 40.0 |

| | 柱　間 | 柱穴間距離(m) | 側面距離(m) | 柱穴間平均距離(m) |
|---|---|---|---|---|
| 南西桁行 | Ｐ１－Ｐ２ | 1.20 | | |
| | Ｐ２－Ｐ３ | 1.05 | | |
| | Ｐ３－Ｐ４ | 1.05 | 3.30 | 1.10 |
| 北西梁行 | Ｐ１－Ｐ８ | 3.64 | 3.64 | 3.64 |
| 北東桁行 | Ｐ５－Ｐ６ | 0.97 | | |
| | Ｐ６－Ｐ７ | 1.05 | | |
| | Ｐ７－Ｐ８ | 1.22 | 3.24 | 1.08 |
| 南東梁行 | Ｐ４－Ｐ５ | 3.58 | 3.58 | 3.58 |




第 15 図　SB01

**柱穴規模**　柱穴は８穴検出された。柱穴の平面形は円形を基本形とする。各柱穴の規模は、第１表のとおりである。

**出土遺物**　Ｐ１・Ｐ３・Ｐ８から土器の小片が出土している。図化はもちろんのこと、器種の特定も困難である。胎土等の特徴から、弥生時代中期と考えられる。

**時　　期**　出土土器から、弥生時代中期と判断される。

SB02（写真図版７）

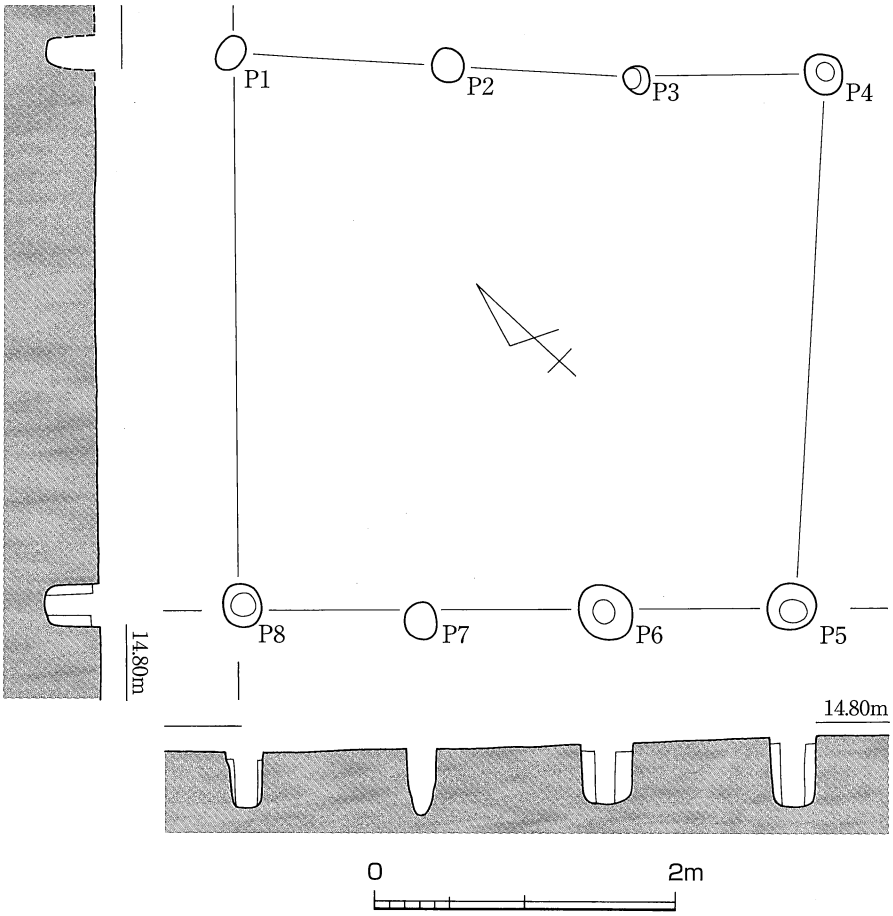
**検出状況**　調査区中央部で検出した（第 13 図）。SB04 と一部平面的に重複するが、調査区内で建物全体が検出されている。SB01 の西側、SB03 の北側に位置する。

**建物規模**　梁行１間、桁行３間の側柱建物である（第 16 図）。各柱穴間の規模およびその平均値は、第２表の通りである。南西桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ 43°　0′　Ｗを示す。

第２表　ＳＢ02 柱穴・建物規模一覧表

| No | 掘方規模 (cm) | 柱痕径 (cm) | 深　さ (cm) |
|---|---|---|---|
| Ｐ１ | 23.0 | | (32.0) |
| Ｐ２ | 21.0 | | 48.0 |
| Ｐ３ | 16.0 | 11.0 | 42.0 |
| Ｐ４ | 25.0 | 12.0 | 42.0 |
| Ｐ５ | 34.0 | 17.0 | 46.0 |
| Ｐ６ | 36.0 | 14.0 | 40.0 |
| Ｐ７ | 21.0 | | 45.0 |
| Ｐ８ | 26.0 | 16.0 | 37.0 |

| | 柱　　間 | 柱穴間距離 (m) | 側面距離 (m) | 柱穴間平均距離 (m) |
|---|---|---|---|---|
| 北東桁行 | Ｐ１－Ｐ２ | 1.44 | | |
| | Ｐ２－Ｐ３ | 1.25 | | |
| | Ｐ３－Ｐ４ | 1.26 | 3.95 | 1.32 |
| 北西梁行 | Ｐ１－Ｐ８ | 3.65 | 3.65 | 3.65 |
| 南西桁行 | Ｐ５－Ｐ６ | 1.25 | | |
| | Ｐ６－Ｐ７ | 1.23 | | |
| | Ｐ７－Ｐ８ | 1.17 | 3.65 | 1.22 |
| 南東梁行 | Ｐ４－Ｐ５ | 3.60 | 3.60 | 3.60 |




第16図　SB02

**柱穴規模**　柱穴は８穴検出された。柱穴の平面形は円形を基本形とする。各柱穴の規模は、第２表のとおりである。

**出土遺物**　Ｐ５から２と６が、Ｐ６から１が、それぞれ出土している(第26図)。

１は、広口壷の口縁部から体部上半にかけて残存する個体である。口縁部外面は、縦方向のヘラミガキが施され、上端部付近に１条、頸部に３条の凹線が施されている。内面は横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は縦方向のハケ調整で仕上げられ、その後最大径部を中心に横方向のヘラミガキが施されている。内面は縦方向のハケ調整により仕上げられ、頸部付近に弱いヘラ削りが加えられている。

２も１と同タイプの壷である。内外面ともハケ調整により仕上げられている。外面上部には２条の、頸部付近には２条の凹線文が施されている。

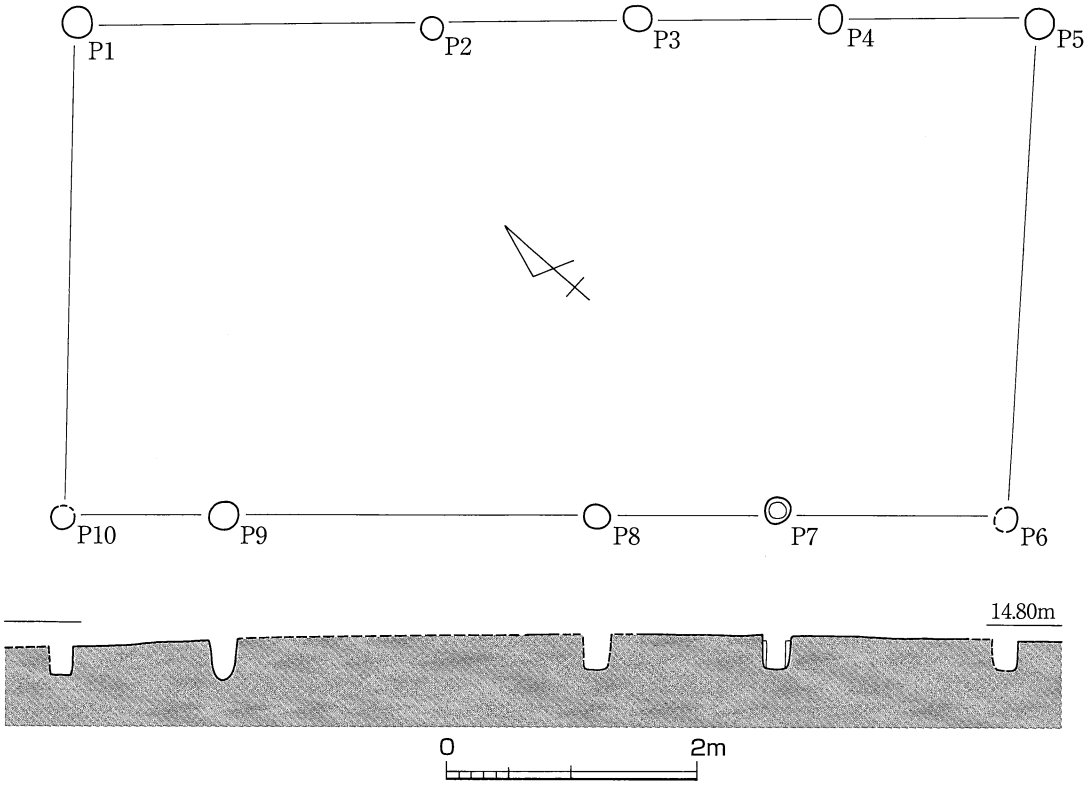
６は脚端部である。内面はヘラ削り（左→右）により、他は横ナデ調整により仕上げられている。

**時　期**　出土土器から、弥生時代中期後半と判断される。

SB03(写真図版７・８)

**検出状況**　調査区中央部で検出した(第13図)。調査区内で建物全体が検出されている。SB05の西側、SB01・02・04の南側に位置する。

**建物規模**　梁行１間、桁行５間の側柱建物である(第17図)。調査時においては、梁行は４間と考




第17図　SB03

えていたが、整理の過程において、５間と判断したものである。ただし、後世の攪乱を受け、北東側がＰ１－Ｐ２間で、南西側がＰ８－Ｐ９間で、それぞれ１穴ずつ検出できなかった。各柱穴間の規模およびその平均値は、第３表の通りである。南西桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ 41°　30′　Ｗを示す。

**柱穴規模**　10穴検出した。各柱穴の規模は、第３表のとおりである。

Ｐ３から７が、Ｐ６から４が、Ｐ７から５が、それぞれ出土している(第26図)。

**出土遺物**　４は甕の底部である。内面がヘラ削り、他はナデ調整により仕上げられている。５は、鉢もしくは高坏と考えられる。口縁部外面には１条の凹線が施されている。ただし、全体的に磨滅が著しく、調整の観察は困難である。７は、器台の底部を中心とした個体である。外面下端部には１条の、その上側には６条の凹線文が施されている。凹線文間は

第３表　ＳＢ03 柱穴・建物規模一覧表

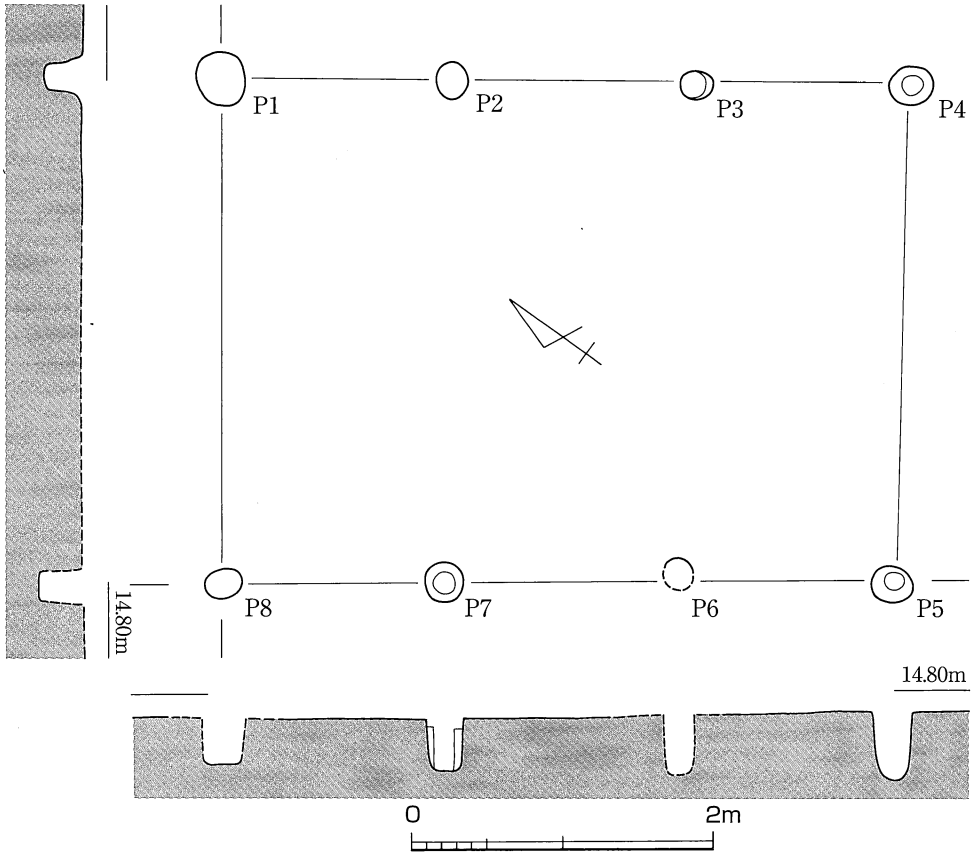
| No | 掘方規模 (cm) | 柱痕径 (cm) | 深　さ (cm) |
|---|---|---|---|
| Ｐ１ | 24.0 | | 37.0 |
| Ｐ２ | 17.0 | | 46.0 |
| Ｐ３ | 22.0 | | 30.0 |
| Ｐ４ | 18.0 | | (47.0) |
| Ｐ５ | 23.0 | | 22.0 |
| Ｐ６ | 19.0 | | 24.0 |
| Ｐ７ | 20.0 | 14.0 | 27.0 |
| Ｐ８ | 21.0 | | (28.0) |
| Ｐ９ | 23.0 | | 33.0 |
| Ｐ10 | 19.0 | | 24.0 |

| | 柱　　間 | 柱穴間距離 (m) | 側面距離 (m) | 柱穴間平均距離 (m) |
|---|---|---|---|---|
| 北東桁行 | Ｐ１－Ｐ２ | 2.82 | | |
| | Ｐ２－Ｐ３ | 1.63 | | |
| | Ｐ３－Ｐ４ | 1.54 | | |
| | Ｐ４－Ｐ５ | 1.75 | 7.74 | 1.55 |
| 南東梁行 | Ｐ５－Ｐ６ | 3.95 | 3.95 | 3.95 |
| 南西桁行 | Ｐ６－Ｐ７ | 1.82 | | |
| | Ｐ７－Ｐ８ | 1.45 | | |
| | Ｐ８－Ｐ９ | 2.97 | | |
| | Ｐ９－Ｐ10 | 1.28 | 6.24 | 1.25 |
| 北西梁行 | Ｐ１－Ｐ10 | 3.96 | 3.96 | 3.96 |

横ナデ調整により仕上げられている。内面は横ナデ調整により仕上げられている。

この他、図化できなかったが、Ｐ２とＰ９から、甕の体部の小片が出土している。これらも中期後半の特徴を示すものである。

**時　　期**　　出土土器から、弥生時代中期後半と判断される。




第18図　SB04

SB04（写真図版８）

**検出状況**　　調査区中央部で検出した（第13図）。調査区内で建物全体が検出されている。SB01の東側、SB03の北側に位置する。

**建物規模**　　梁行１間、桁行５間の側柱建物である（第18図）。各柱穴間の規模およびその平均値は、第４表の通りである。南西桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ 36°　0′　Ｗを示す。

第４表　ＳＢ04 柱穴・建物規模一覧表

| No | 掘方規模 (cm) | 柱痕径 (cm) | 深　さ (cm) |
|---|---|---|---|
| Ｐ１ | 37.0 | | 26.0 |
| Ｐ２ | 24.0 | | 33.0 |
| Ｐ３ | 22.0 | 17.0 | 36.0 |
| Ｐ４ | 29.0 | 13.0 | 44.0 |
| Ｐ５ | 27.0 | 13.0 | 46.0 |
| Ｐ６ | 19.0 | | (40.0) |
| Ｐ７ | 25.0 | 14.0 | 35.0 |
| Ｐ８ | 25.0 | | (30.0) |

| | 柱　　間 | 柱穴間距離 (m) | 側面距離 (m) | 柱穴間平均距離 (m) |
|---|---|---|---|---|
| 北東桁行 | Ｐ１－Ｐ２ | 1.54 | | |
| | Ｐ２－Ｐ３ | 1.60 | | |
| | Ｐ３－Ｐ４ | 1.46 | 4.60 | 1.53 |
| 南東梁行 | Ｐ４－Ｐ５ | 3.30 | 3.30 | 3.30 |
| 南西桁行 | Ｐ５－Ｐ６ | 1.44 | | |
| | Ｐ６－Ｐ７ | 1.55 | | |
| | Ｐ７－Ｐ８ | 1.48 | 4.47 | 1.49 |
| 北西梁行 | Ｐ１－Ｐ８ | 3.36 | 3.36 | 3.36 |

柱穴規模　８穴検出した。各柱穴の規模は、第４表のとおりである。

出土遺物　Ｐ１・Ｐ５・Ｐ６から小片が出土している。いずれも、図化はもちろんのこと、器種の特定も困難である。胎土等の特徴から、弥生時代中期と考えられる。

時　期　出土土器から、弥生時代中期と判断される。

SB05

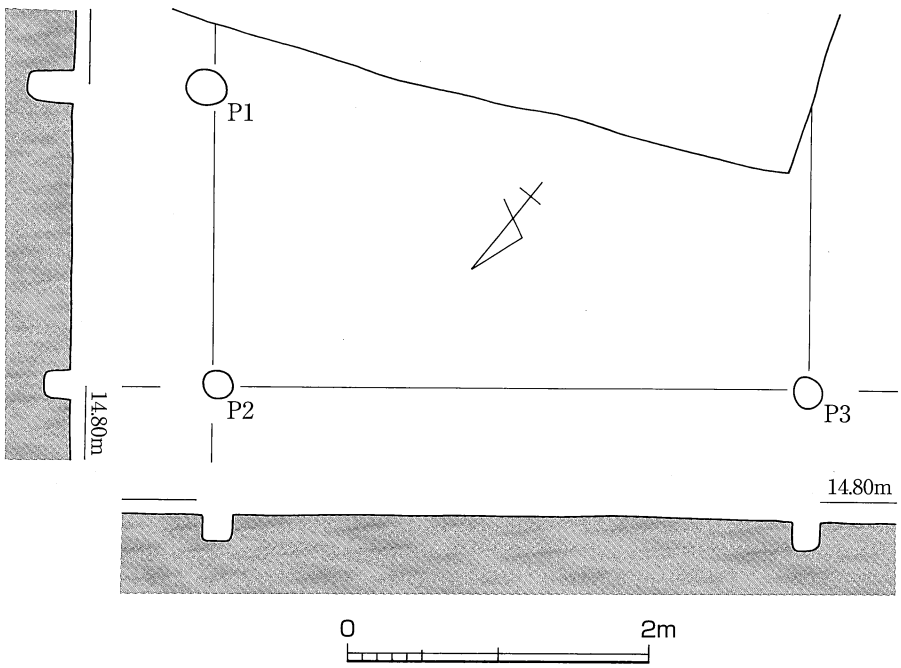
検出状況　調査区中央部東端で検出した(第13図)。建物の一部を検出したにとどまり、大半は調査区外に拡がるものと考えられる。SB03の南東側に位置する。

建物規模　梁行方向が１間で、桁行方向では１間分検出した側柱建物である(第19図)。柱穴間の規模は、Ｐ１－Ｐ２間で2.0ｍ、Ｐ２－Ｐ３間で3.90ｍを測る。北東桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ39°　0′　Ｗを示す。

柱穴規模　柱穴は３穴検出した。各柱穴の掘り方径及び検出面からの深さは、Ｐ１で26㎝・30㎝、Ｐ２で20㎝・17㎝、Ｐ３で18㎝・18㎝である。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　土器が出土していないため、時期の特定は困難である。ただし、SB03と棟軸方向をほぼ同じくすることから、弥生時代中期後半と考えられる。




第19図　SB05

（2）柱穴

上記建物を構成する柱穴以外にも、数穴検出されている。これらの柱穴からは、甕を中心とした土器の小片が出土している。胎土等の特徴から、弥生時代中期を中心とした時期と考えられる。

（３）土坑

３基検出した。

SK01

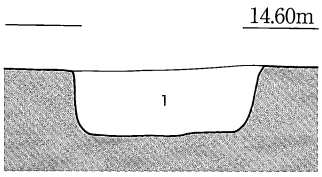
検出状況　調査区西隅で検出した(第13図)。SD01の南西に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規　模　平面形は楕円形を呈する。その規模は、主軸方向で75㎝、その直交方向で50㎝を測る。横断面は箱形に近い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは18㎝を測る。

埋没状況　暗黒褐色シルト混じり砂１層からなる(第20図)。その層相から、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　土器の小片が出土している。胎土等の特徴から、中期に位置付けられるものと考えられる。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。




1.暗黒褐色シルト混じり砂

0　50cm

第20図　SK01

SK02

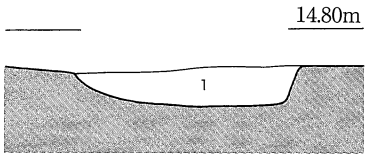
検出状況　調査区中央部で検出した(第13図)。SB03の北隅に位置する。後世の撹乱を受け、全体の1/2程度検出できたにとどまる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規　模　平面形は隅丸長方形を呈していたものと推測される。その規模は、主軸方向で1.30ｍ残存し、その直交方向で60㎝を測る。横断面は逆台形をなす。ただし、一部は皿形をなしている。最深部における検出面からの深さは10㎝である。

埋没状況　暗灰褐色シルト混じり極細砂１層からなる(第21図)。その層相から、人為的に埋められたものと判断される。下層には、炭片･焼土塊が多く含まれていた。

出土遺物　叩きが施された甕の体部小片が出土している。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代後期から古墳時代初頭と考えられる。




1.暗灰褐色シルト混じり極細砂

0　50cm

第21図　SK02

SK03（写真図版９）

検出状況　調査区北東端中央部で検出した(第13図)。後世の撹乱を受けることなく、全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規　模　平面形はほぼ円形に近く、その規模は1.65ｍ×1.50ｍを測る。横断面は箱型に近い逆台形をなし、底部はほぼ平坦である。最深部における検出面からの深さは76㎝を測る。

埋没状況　６層からなる(第22図)。層相から、最上層の１層は人為的に埋められた層と判断される。また、２～５層は黄灰色砂をブロック状に含み、周囲からの流れ込みにより堆積した層と判断される。また最下層の６層は、自然堆積によるものと判断される。

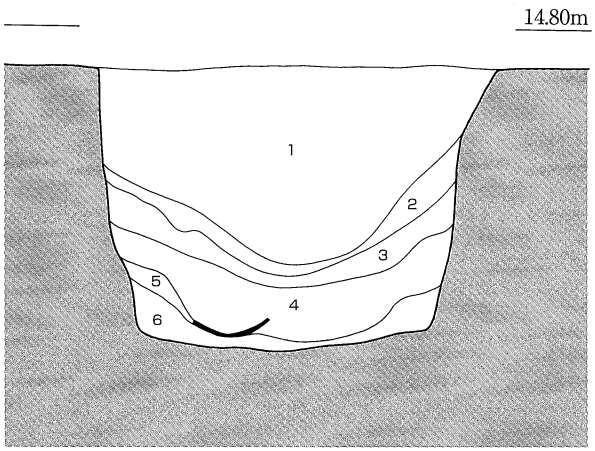
出土遺物　土坑中央部６層上面に、甕（９）の下半部が底部を下にして置かれた状態で出土している(写真図版９)。

９(第26図)は、体部のみ残存する。球形をなし、底部も丸底である。内面は斜方向（左

下左下→右上)のヘラ削りにより、外面は縦方向を主体としたハケ調整により仕上げられている。また、外面全体に煤の付着が認められ、特に最大径部より上側の付着が顕著である(写真図版 19)。さらに内面には、多くの炭化米が付着している。

この他、図化できなかったが、叩きが施された甕の体部小片も出土している。

時　　期　　出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。




1.暗黒褐色砂混じりシルト　　4.黒灰色砂混じりシルト
2.暗黒褐色砂混じりシルト　　5.暗黒灰色シルト
3.黒褐色砂混じりシルト　　6.黒灰色砂混じりシルト

0　　1m

第 22 図　SK03

（4）溝

４条検出した。いずれもほぼ同規模かつ小規模である。また、先述したように、建物基礎による撹乱が顕著で、どの溝も寸断された状況で検出されている。

SD01

検出状況　　調査区西部で検出した(第 13 図)。ほぼ直線的な溝で、南端は調査区内で収束し、北端部は撹乱を受け、途切れている。SD03 とほぼ同様の、SD02 とは直交する方向性を示している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規　　模　　2.40 m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は 30 cm、最深部における検出面からの深さは５cmを測る。

埋没状況　　暗黒褐色シルト１層からなる。

出土遺物　　土器の小片が出土している。胎土等の特徴から、弥生時代中期以降と判断される。

時　　期　　出土土器から判断して、弥生時代と考えられる。

SD02(写真図版９)

検出状況　　調査区中央部で検出した(第 13 図)。SB03 の南側に位置する。撹乱により寸断されているが、他の遺構との切り合い関係は認められない。東西方向に直線的な溝で、両端とも調査区内で途切れている。SB03 桁行方向とほぼ一致する。また、その方向は SD01・03 とは直交関係にある。

規　　模　　6.60 m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅 30 cm、最深部における検出面からの深さ 19 cmを測る。

埋没状況　　暗灰褐色小礫混じりシルト１層からなる。その層相から、人為的に埋められたものと判断される。

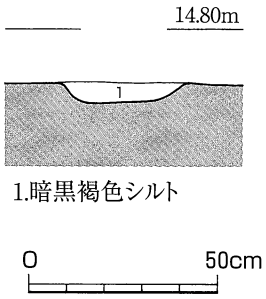
出土遺物　　８は甕の底部が出土している(第 26 図)。内面はナデ調整により仕上げられている。

時　　期　　出土土器および SB03 との関係から、弥生時代中期後半と考えられる。

SD03

検出状況　調査区中央部西側で検出した(第13図)。建物群の西側に位置する。撹乱により4箇所で寸断されているが、他の遺構との切り合い関係は認められない。蛇行傾向にはあるが、全体的にはほぼ直線的な溝で、両端とも調査区内で収束している。その方向性は、SD01と同じくし、SD02とは直交関係にある。また、SB01～SB03の梁行方向とほぼ一致する。

規　模　15.55 m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は31 cm、最深部における検出面からの深さは5 cmを測る。



第23図　SD03

埋没状況　暗黒褐色シルト1層からなる(第23図)。

出土遺物　土器の小片が出土している。胎土等の特徴から、弥生時代中期以降と判断される。

時　期　出土土器および建物群との関連から、弥生時代中期後半と考えられる。

SD04

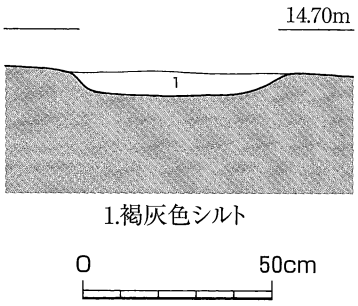
検出状況　調査区中央部で検出した(第13図)。SB03の北隅に位置する。後世の撹乱を受け、全体の1/2程度検出できたにとどまる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規　模　9.45 m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は56 cm、最深部における検出面からの深さは7 cmを測る。

埋没状況　褐灰色シルト1層からなる(第24図)。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　SD05との関連から、平安時代後期と考えられる。



第24図　SD04

SD05

検出状況　調査区東隅で検出した(第13図)。南北方向から北西－南東方向に屈曲する直線的な溝である。SD04の東側に位置し、一部はほぼ平行する。北端部は調査区外まで伸び、他端は調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規　模　3.90 m検出した。横断面は皿形に近い逆台形をなす。検出面における幅は75 cm、最深部における検出面からの深さは6 cmを測る。

埋没状況　褐灰色シルト1層からなる。

出土遺物　土師器の椀の底部片が出土している。底部は輪高台をなすもので、平安時代後期の特徴を示すものである。

時　期　出土土器から、平安時代後期～鎌倉時代初頭と考えられる。

SD06

検出状況　調査区東隅で検出した(第13図)。SD04の東側に位置し、これと平行する。SD05とは撹乱により直接的な関係を明らかにすることは出来なかった。ただし、両者の位置関係

位置関係から判断して、SD05 に切られている可能性が高い。他の遺構との切り合い関係は認められない。

規　　模　　2.10 m検出した。横断面は皿形に近い逆台形をなす。検出面における幅は 60 cm、最深部における検出面からの深さは６cmを測る。

埋没状況　　褐灰色シルト１層からなる。

出土遺物　　全く出土していない。

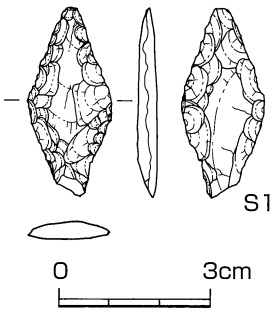
時　　期　　SD04・SD05 との関係から、平安時代後期～鎌倉時代初頭と考えられる。

（５）その他

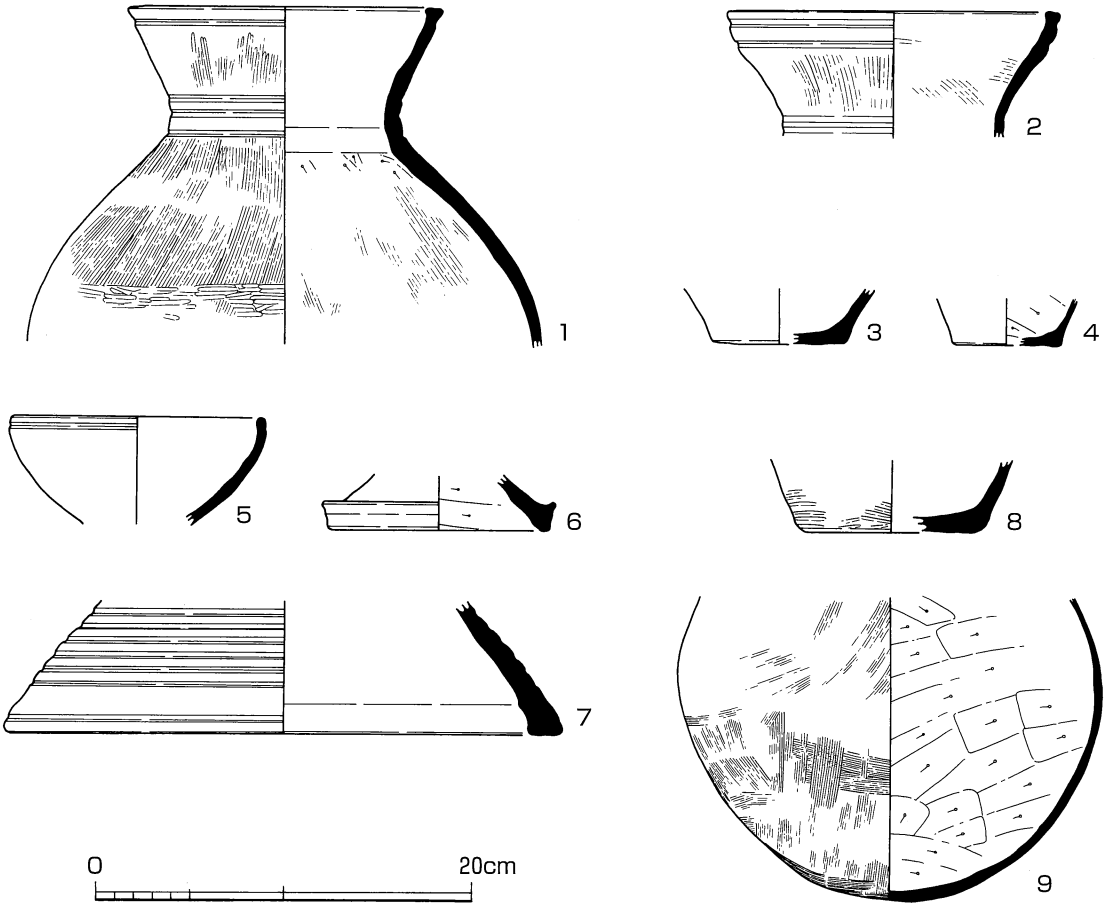
以上の遺構に伴って出土した遺物の他に、包含層から土器と石器が出土している。

土　　器　　甕の底部片（３）が出土している（第 26 図）。内外面とも、摩滅のため調整は観察できない。

石　　器　　サヌカイト製の石鏃が１点出土している（第 25 図）。基部を欠く以外は完存する。長さ・幅は 3.75 cm・1.65 cmを測り、中央部の厚みは 3.5 mmである。また、残存重量は 2.3g である。




第 25 図　出土石器




1･2･6　SB02出土土器　　8 SD02出土土器　　3 包含層出土土器
4･5･6　SB03出土土器　　9 SK03出土土器

第 26 図　第１次調査出土土器

# 第２節　第２次調査

## １．概要

第２次調査は庁舎棟等新営工事に伴う本発掘調査である。調査地は、以前は姫路少年刑務所の旧道場が建っていたところであり、その基礎などにより、遺構面が大きく撹乱を受けている部分が広範囲に認められた。

遺構面や遺構を検出したのは、調査区を４分割した場合の南東部と南西部のみであった。この地区においても旧建物の基礎溝とみられる撹乱によって遺構は分断されていたり、削平を受けている状態であった。このことは遺構面が現地表面から約 35 cm前後の深さであるということも基因しているのであろう。

検出した遺構は、弥生時代の溝・柱穴、中世の掘立柱建物・土坑・溝・ピットである。遺構は密集したような状態を示さず、その数も多くはない。

## ２．基本土層と遺構の検出

基本土層

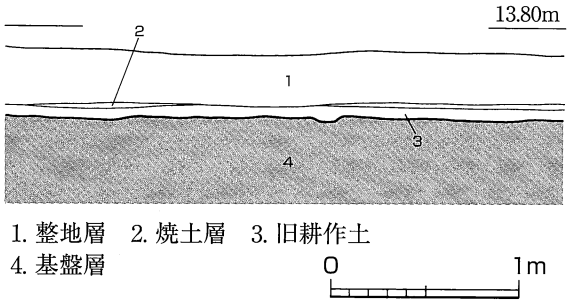
遺構面の標高は 13.75m 前後である。現地表面から 35 cm前後で遺構面に達する。このため、基本土層（第 27 図）はきわめて単純であることは第１次調査の結果と同じである。２層は、第２次世界大戦時の昭和 20 年に受けた空襲によって被災したときの焼土層と捉えられ、１層は昭和 20 年以降の整地層である。

２層の焼土層の下層は、旧耕作土（床土層も含む）・基盤層となっており、いわゆる遺物包含層は認められなかった。

基盤層は黄灰色シルト混じり極細砂～シルト質極細砂であり、この層の上面から縄文時代後期の土器の細片が出土している。

遺構の検出

遺構面は１面のみである。弥生時代の遺構も中世の遺構も基盤層上面で検出した。




第 27 図　土層断面図

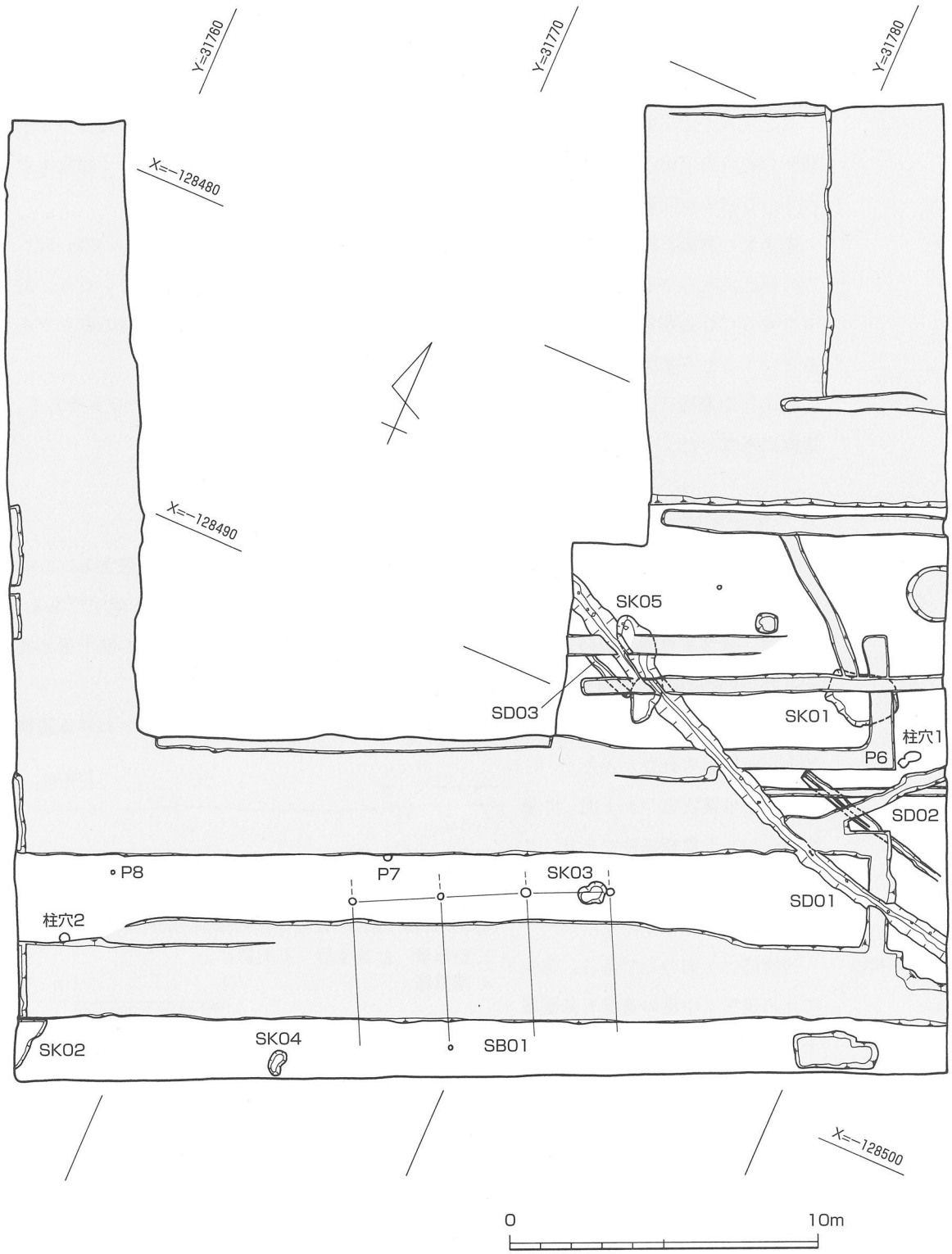
## ３．遺構と遺物

検出遺構

遺構としては、溝・掘立柱建物跡・柱穴・土坑・ピットを検出した。

遺構の時期判別は、出土土器を基本としたが、遺構から土器が出土しない場合は遺構内埋土の層相によって判断している。弥生時代は SD01 を、中世は SK05 の層相を基本として判断している。

その結果、遺構の時代をみれば、弥生時代には溝と柱穴が、中世では掘立柱建物、土坑、溝が検出されている。遺構の数が多くなく、以下の説明では時代別ではなくて、遺構別に説明している。




第 28 図　第２次調査平面図（アミカケは撹乱）

（1）溝状遺構

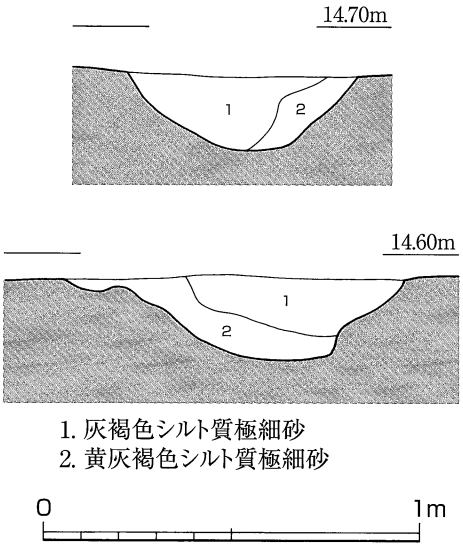
溝は３条検出している。SD01 のみが規模も大きく、調査区内全域で検出されている。SD02・SD03 は撹乱や後世の削平で寸断された状態で検出されている。SD02・SD03 は遺構内埋土の層相から中世と捉えているが、弥生時代の SD01 と併行に走行していることは気にかかるところである。

SD01（写真図版 12・13・15・17）

検出状況　調査区南東部で検出した（第 28 図）。SK05 と切り合い関係にあり、SK05 が SD01 を切っている。SD01 は南東から北西方向に走る溝で、緩やかに弧状を呈しているように捉えられる。

規　模　長さ約 17 m にわたって検出した。横断面はＵ字形を呈する。検出面からの深さは 25 ～ 30 cm前後を測るが、上面が大きく削平を受けている可能性が考えられ、本来は 50 cm 以上の深さがあったと想定される。

溝の性格としては、南西に膨らむ弧状を呈しており、集落の周囲をめぐる環濠の可能性も考えられる。溝の規模から環濠と表現するよりも環溝と表現する方が適切であろう。環溝とすれば弧状の内側は北東側になるが、今回の調査では同時期の遺構は柱穴１基のみで、竪穴住居址等の遺構は全く検出されていない。翻って、弧状の外側にあたる南西部では、第１次調査で検出した環溝と同時期の弥生時代中期後半の掘立柱建物群が存在している。



第 29 図　SD01

なお、溝底は北西端が南東端に比べて僅かに 8 cm低くなっており、北西方向に流れていた可能性が指摘できるかもしれない。

埋没状況　埋土は基本的に２層（第 29 図）に分れるが、SK05 と切り合い関係のある付近では３層に分別できるところもある。

溝内からは弥生土器片がそれなりに出土しているが、すべて溝底から 15 ～ 25 cm前後の上位で出土している。その層相は埋土上層の灰褐色シルト質極細砂内に包含されている。土器は弥生時代中期後半で、この溝はこの時期にほぼ埋没したと捉えられる。

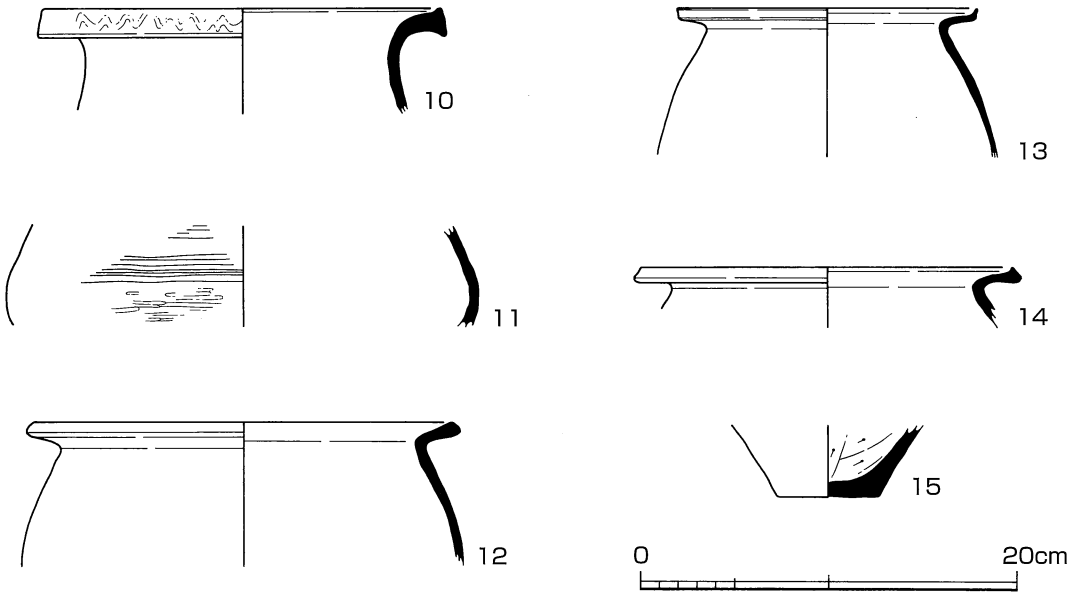
出土遺物　弥生土器の器種で図示したものは壺と甕であるが、小片で図示していないものの中には器台等が出土している。

10 は広口壺の口頸部片で、摩滅のため文様や調整痕は不鮮明であるが、口縁端面に櫛描波状文、頸部外面に縦方向のハケ調整を認めることができる。口縁端部は上下に拡張している。

11 は壺胴部片で、胴部最大径の上部に櫛描直線文を２単位で飾っている。下の直線文は７条で、上の直線文は４以上である。文様下の外面には横方向のヘラミガキが施されているが、内面の調整は摩滅のため不明である。

12 ～ 14 は甕片である。12・14 は口縁端部が肥厚しており、13 は口縁端部をつまみ上げている。12 は外面に不鮮明であるが縦方向のハケ調整がかろうじて観察できるのみである。12 は口縁部にスス付着の痕跡が認められる。

15 は甕底部片で、内面には下から上方向のヘラ削りが認められる。外面は２次焼成で赤変しており、使用時の痕跡であろう。




第30図　SD01 出土土器

小片で図示していない弥生土器で、器厚1.2cm前後の大形器台の脚部と口縁部、短頸壺、鉢等がある。

器台の脚部小片は外面にヘラ描きによる山形文とみられる文様を、脚端面に退化した凹線文（Ａ種）を施している。口縁部小片は口縁端面に凹線文（Ａ種）２条が認められる。

短頸壺小片は外面に６条の凹線文（Ｂ種）を施しているものと口頸部の高さが3.0 cmと短いものの二者がある。器種は細片で不明だが、生駒西麓産の胎土をもつものも１点出土している。

時　期　出土土器から弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式併行）と判断される。

SD02（写真図版 12・13）

検出状況　調査区南東部で検出した（第28図）。SD01の北側に位置する。ほぼ直線的に走る溝で、撹乱や削平等により途中で途切れていると捉えられるが、長さ約5.5 mにわたって検出した。検出したほぼ中央で２条に分れている。

規　模　横断面はＵ字形をなし、検出面からの深さ約10 cmを測る。

埋没状況　灰色細砂１層からなる。この層相から人為的に埋められた可能性が高いと判断される。

出土遺物　土器小片が出土しているが、時期の特定は困難である。

時　期　埋土の層相から平安時代末～鎌倉時代初と捉えている。

SD03（写真図版 12・15下）

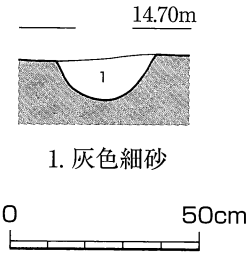
検出状況　調査区の南東部で検出した（第28図）。SD01の南側を走る溝である。長さ2.0 m前後検出した。撹乱や削平でその全貌は不明確であるが、南東方向は溝が収束する状況がみられ、北東方向は撹乱で途切れている。

規　模　横断面はＵ字形をなし、検出面における幅26 cm、深さ13 cmを測る小規模な溝である。

**埋没状況**　灰色細砂１層からなる。層相から人為的に埋められた可能性が高いと判断している(第 31 図)。

**出土遺物**　全く出土していない。

**時　　期**　埋土が SK05 と同じ層相であることから、平安時代末～鎌倉時代初頭と考えている。




第 31 図　SD03

（２）掘立柱建物跡

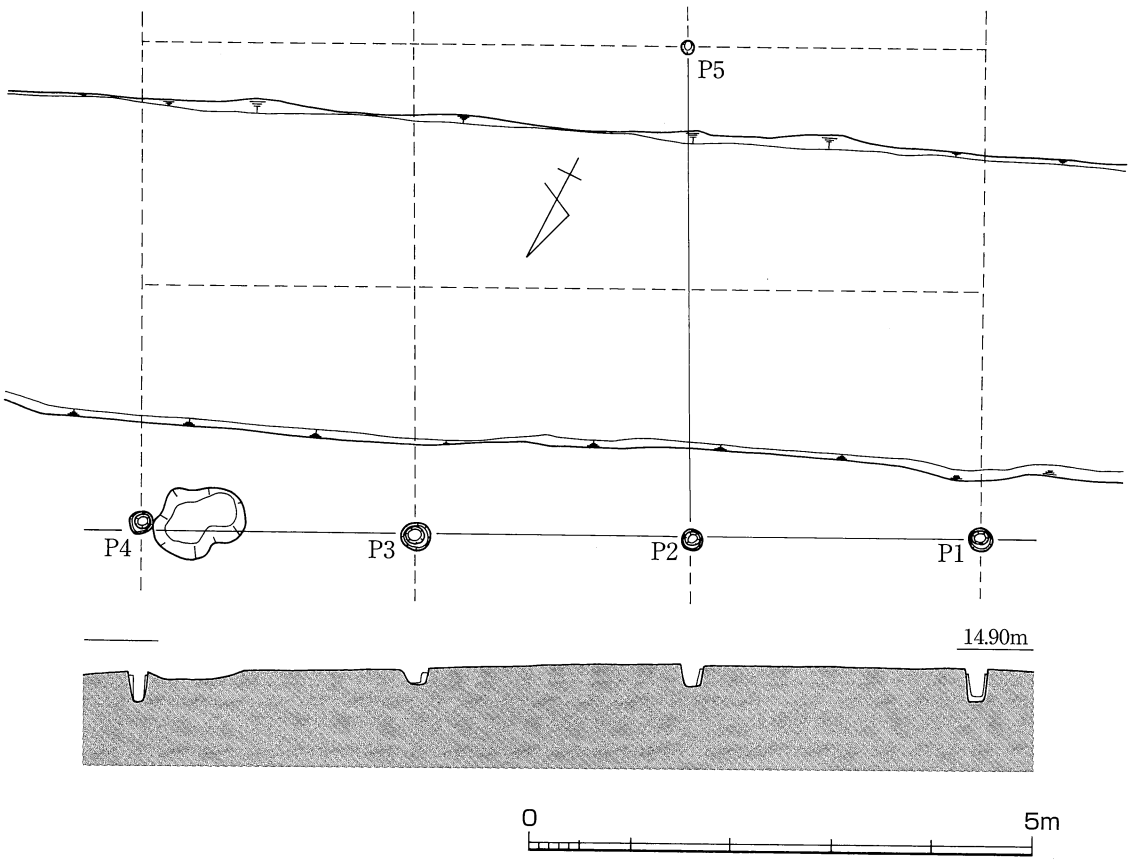
掘立柱建物は１棟を検出したのみである。他に、柱穴２基、ピット３基を検出している。

**SB01（写真図版 14）**

**検出状況**　調査区南東部と南西部にまたがって検出した(第 28 図)。後世の攪乱・削平により、その全体を検出できなかったが、一直線に並んだ４基の柱穴と、この柱列と直交方向の柱穴が南側に距離をおいて１基存在することから掘立柱建物跡であると判断した。

**建物規模**　検出状況から東西３間、南北２間以上の掘立柱建物である。東西の柱間距離は 2.7 ～ 2.8 mとほぼ等間隔である。南北のＰ２とＰ５の柱間距離は 4.9 mである。

**柱穴規模**　柱穴は５基検出した。柱穴の平面形は円形で、掘り方径は、Ｐ１が 22 cm、Ｐ２が 23 cm、Ｐ３が 30 cm、Ｐ４が 22 cmである。柱痕跡の径は、Ｐ１が 18 cm、Ｐ２が 18 cm、Ｐ３が 19 cm、Ｐ４が 15 cmである。




第 32 図　SB01

出土遺物　Ｐ１とＰ２から土器の小片が出土している。小片からは時期の特定は困難であるが、中世土器的な胎土の特徴を示していると捉えている。なお、Ｐ３とＰ４からは基盤層上面に包含されていたと考えられる縄文土器（後期）小片が出土していることを付記しておく。

時　期　柱穴埋土がSK05と同じ層相を示すことと土師器小片が中世的胎土をもつことから、平安時代末～鎌倉時代初頭と考えている。

（３）柱穴とピット（第28図）

建物を構成する柱穴ではないが、柱穴は２基検出した。柱穴１はSD01の内側で、柱穴２はSD01の外側、調査区西壁付近で検出した。柱穴１・２とも土器は全く出土していないが、SD01と類似した埋土であることから柱穴１・２は弥生時代中期のものと判断した。

明確な柱痕跡が確認されないものをピットとした。Ｐ６～Ｐ８の３基を検出（第28図）しており、Ｐ６は柱穴１と接して、Ｐ７はSB01の付近から、Ｐ８は柱穴２の北側2.5ｍの位置から検出した。Ｐ６～Ｐ８からは土器は全く出土していないが、埋土がSK05と類似した層相を示すことから、平安時代末～鎌倉時代初頭と判断している。

（４）土坑

５基を検出した。

SK01（写真図版16上）

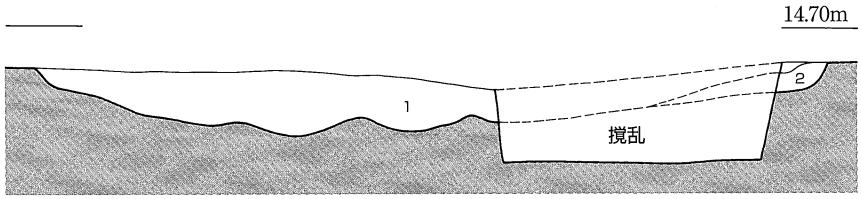
検出状況　調査区南東部で検出した（第28図）。SD01の北側に位置する。後世の撹乱で、その全容は窺えない。

規　模　平面形は不整形な楕円形に復原できるであろう。復原的にみて長軸2.3ｍ、短軸1.7ｍほどの規模であろう。横断面は浅い皿状の形状で、その底面は一様でない。最深部における検出面からの深さは17㎝を測る。

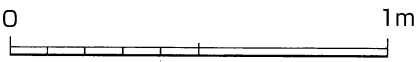
埋没状況　基本的には灰色細砂１層からなるが、東肩部に壁が崩れた埋土（濁黄灰色極細砂混じり細砂）が部分的に認められるところがある。

出土遺物　土器小片と鉄器小片が出土している。鉄器小片は長さ1.7㎝、径0.55～0.65㎝の棒状の鉄器片である。土器は小片で時期の特定は困難である。埋土の層相から平安時代末～鎌倉時代初の時期と判断している。なお、18世紀の肥前系染付陶器や19世紀の京焼系の透明釉陶器などの近世の遺物の混入がみられた。

時　期　埋土の層相から平安時代末～鎌倉時代初頭と考えている。




1.灰色細砂　2.濁黄灰色極細砂混じり細砂




第33図　SK01

SK02

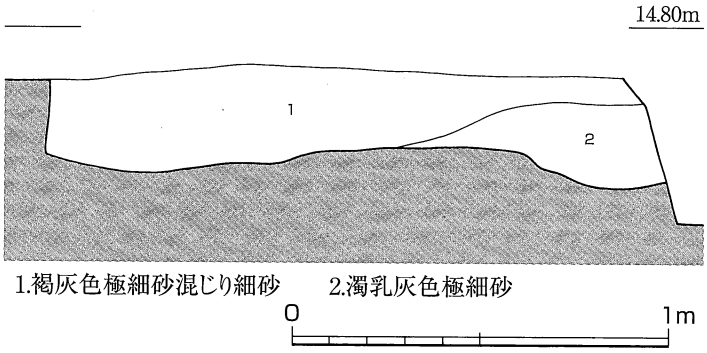
検出状況　調査区南西部の西隅で検出した(第 28 図)。後世の撹乱と土坑が調査区によって限られており、その全体の 1/4 程度検出したのみであり、その全形は窺い知れない。

規　模　規模は不明であるが、２m以上の規模をもつ土坑である。平面形は明らかにできないが、おそらく楕円形を呈するであろう。横断面をみれば、南の肩はほぼ垂直な形状であり、板材を設置していたかもしれない。床面は一様でない。最深部における検出面からの深さは 30 cmを測る。

埋没状況　２層からなる。

出土遺物　須恵器小片１点が出土しているが、時期を判別できる資料ではない。

時　期　埋土の層相から平安時代末～鎌倉時代初と考えている。




第 34 図　SK02

SK03（写真図版 16 中）

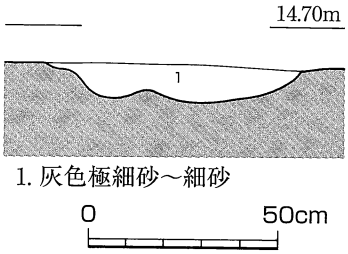
検出状況　調査区南東部で検出した(第 28 図)。SB01 のＰ４の南側に接して検出された。

規　模　平面形は不整な楕円形を呈している。長軸 92 cm、短軸 70 cmである。横断面は皿状の形状であるが、底面は一様でない。最深部における検出面からの深さは 10 cmを測る。

埋没状況　灰色極細砂～細砂の１層からなる。その層相から人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　須恵器小片１点が出土している。この小片は中世前後のものとみられるが、この細片のみでこの土坑の時期を決めるのは困難であり、無謀でもある。

時　期　埋土の層相から、平安時代末～鎌倉時代末と考えている。



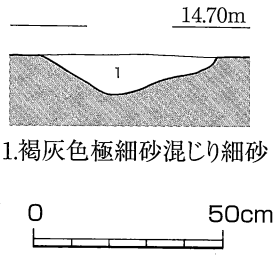

第 35 図　SK03

SK04（写真図版 16 下）

検出状況　調査区南西部で検出した(第 28 図)。

規　模　平面形は不整な楕円形を呈している。長軸 80 cm、短軸 50 cm である。横断面は皿状を呈している。最深部における検出面からの深さは 10 cmを測る。

埋没状況　灰色極細砂混じり細砂１層からなる。この層相から人為的に埋められたものと判断される。この層には灰が含まれていた。




第 36　SK04

出土遺物　　全く出土していない。

時　　期　　埋土の層相から平安時代末～鎌倉時代末と考えている。

SK05（写真図版 15 中・17）

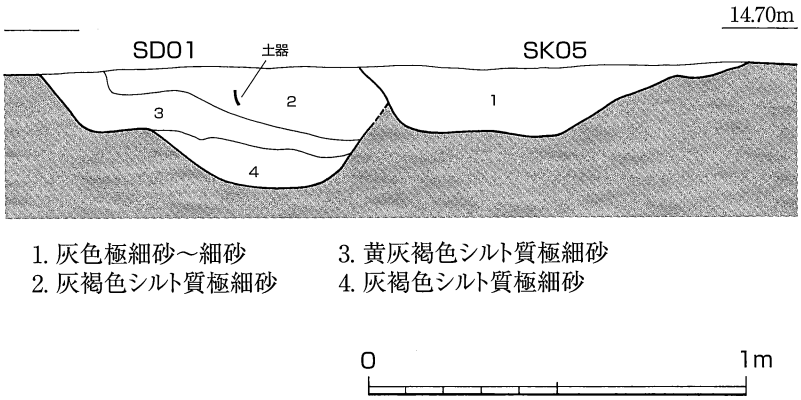
検出状況　　調査区南東部で検出した（第 28 図）。SD01 を切ってつくられているが、後世の攪乱が著しくその全体の形状を捉え難くしている。

規　　模　　平面形は不整な長楕円形を呈していると推定している。長軸 350 cm、短軸 60 cmである。横断面は皿状を呈する。最深部における検出面からの深さは 18 cmを測る。

埋没状況　　灰色極細砂～細砂１層からなる。その層相から人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　　図示していないが、比較的大きな土師器底部破片が出土している。この土器底部には回転糸切り底をもち、平安時代末～鎌倉時代初の時期である。他に土器のごく小片が出土しているが時期の特定は困難なものである。他に、長さ 2.3 cm、幅 1.5 cm、厚み 0.5 cmの鉄滓片１点が出土している。

時　　期　　埋土の層相と土師器底部の破片から平安時代末～鎌倉時代初頭の時期と考えている。




第 37 図　SK05 と SD01

（５）その他

SB01 のＰ３とＰ４でも縄文土器の小片が出土したことは前述しているが、遺構面精査時にも基盤層上面から縄文時代後期の土器小片が４点ほど出土している。また、攪乱層の中から 16 世紀の中国製の染付けや 18 ～ 19 世紀の肥前系陶器、京焼系陶器、土師器焙烙などが出土していることを付記しておきたい。

# 第３章　まとめ

はじめに　前章において、２次に及ぶ調査(第１次調査・第２次調査)の結果を報告してきた。この結果、弥生時代中期（Ⅰ期)・古墳時代前期（Ⅱ期)・平安時代後期～鎌倉時代前半（Ⅲ期）の３時期の遺構が明らかとなった。以下、その概要を記し、本報告のまとめとしたい。

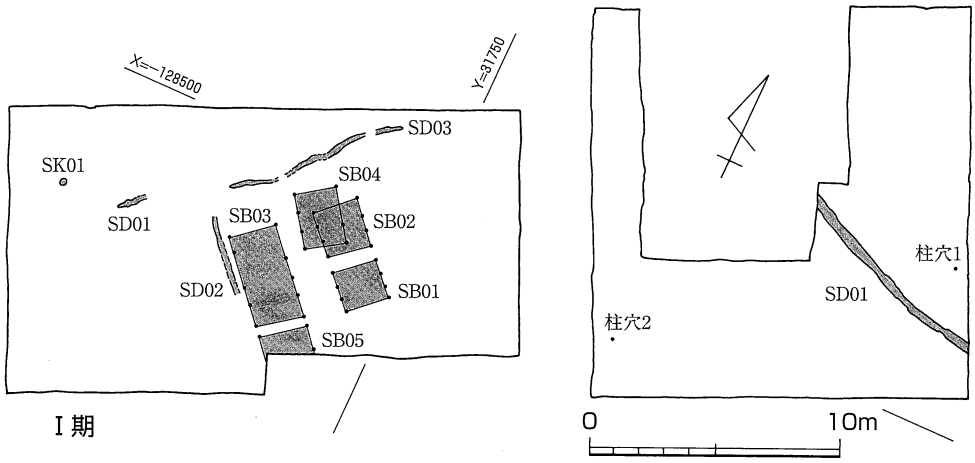
Ⅰ期　第１次調査では掘立柱建物跡５棟（SB01 ～ S B05）と３条の溝（SD01 ～ SD03）を検出した。これらの掘立柱建物と溝はその方向性をほぼ同じくすることから、両者が有機的な関連性をもっていたものと理解できる。具体的には、溝が掘立柱建物群を区画する機能を有していたものと考えられる。

第２次調査では、SD01 と柱穴１・柱穴２が当該期の遺構に該当する。ただし、この溝と第１次調査で検出した遺構群との関係を明らかにすることは困難である。さらには、第２次調査 SD01 との関係についても、本報告では明確にすることは困難である。

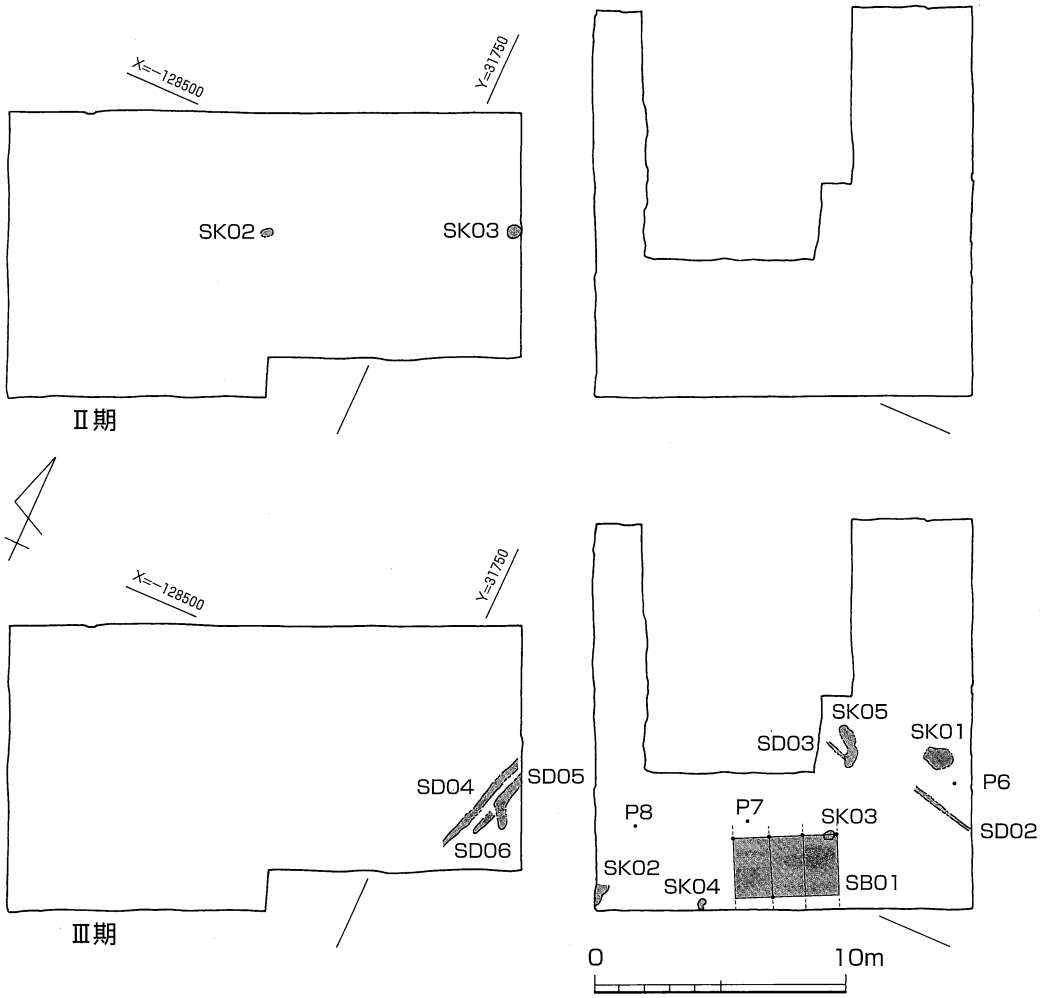
Ⅱ期　第１次調査で検出した SK02 と SK03 が該当する。第２次調査では当該期の遺構は検出されていない。SK03 については、底から炭化米が多量に付着した甕が出土しており、貯蔵穴の可能性が考えられる。

Ⅲ期　第１次調査では SD04 ～ SD06 が、第２次調査では SB01・SD02・SD03・SK01 ～ SK05．柱穴・ピットが、該当する。第１次調査で検出した溝と第２次調査で検出した溝とはほぼ直交関係にあり、有機的な関連が考えられる。これに対して、SB01 とは方向性を異にし、溝と SB01 との間には微妙な時期差が考えられる。

小　結　以上から、Ⅰ期が当遺跡のひとつの中心的な時期と考えられる。この時期は、弥生時代中期後半にあたり、銅鐸の鋳型が出土した名古山遺跡・今宿丁田遺跡と同時期に位置付けられる。しかし、今回の調査では、名古山遺跡との関連を直接的結びつけるような遺構・遺物は見つからなかった。




第 38 図　遺構の変遷（１）


X=−128500
Y=31750
SK02
SK03
Ⅱ期
X=−128500
Y=31750
SD04
SD05
SD06
Ⅲ期
SK05
SD03
SK01
P6
SD02
P8
P7
SK03
SK02
SK04
SB01
0
10m

第 39 図　遺構の変遷（2）

## 出土土器観察表

| 報告No | 調査次数 | 出土遺構 | 種別 | 器種 | 残存 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 色調 | 胎土 | 備考 | 挿図 | 写真図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1 | SB02 | 弥生 | 壷 | 口頸部2/3<br>体部1/5 | 16.6 | 17.9 | | 浅黄橙 | 1mm以下の石英含む | 頸径12.1cm | 26 | 18 |
| 2 | 1 | SB02 | 弥生 | 壷 | 口縁部1/4 | 16.5 | 6.6 | | にぶい橙<br>～灰白 | 0.2～2mm大の石英・長石・チャート含む | | 26 | 18 |
| 3 | 1 | 包含層 | 弥生 | 甕 | 底部1/3 | | 2.9 | 7.1 | にぶい黄<br>～明黄褐 | 0.1～0.5mm大の石英・長石多く含む | | 26 | 18 |
| 4 | 1 | SB03 | 弥生 | 甕 | 底部1/4 | | 2.5 | 5.7 | 黄灰～黒 | 0.5mm大の砂粒わずかに含む | | 26 | 18 |
| 5 | 1 | SB03 | 弥生 | 鉢 | 口縁部1/4弱 | 13.0 | 5.7 | | 浅黄橙 | 0.2～1mm大の石英・赤色粒わずかに含む | | 26 | 18 |
| 6 | 1 | SB02 | 弥生 | 脚部 | 底部1/6 | | 2.9 | 11.6 | 浅黄橙～<br>にぶい橙 | 0.5～2mm大の石英・チャート含む | | 26 | 18 |
| 7 | 1 | SB03 | 弥生 | 器台 | 底部1/8 | | 7.1 | 29.7 | 浅黄橙～灰黄 | 0.15～4mm大の長石・チャート含む | | 26 | 18 |
| 8 | 1 | SD02 | 弥生 | 甕 | 底部1/4 | | 4.8 | 9.0 | 浅黄橙～灰黄 | 1mm大のチャート・長石含む | | 26 | 18 |
| 9 | 1 | SK03 | 弥生 | 甕 | 体部下半ほぼ完存 | | 16.1 | | にぶい黄褐<br>～にぶい黄橙 | 0.3～1.5mm大の石英・長石・チャートやや多く含む | 外面煤多量に付着 | 26 | 19 |
| 10 | 2 | SD01 | 弥生 | 壷 | 口縁部1/3 | 21.0 | 5.6 | | にぶい黄橙 | 0.5～2mm大の長石・クサリレキ多く含む | 頸径16.5cm | 30 | 19 |
| 11 | 2 | SD01 | 弥生 | 壷 | 体部わずか | | 5.4 | | 浅黄橙～灰白 | 0.5mm以下の石英わずかに含む | 体部径25.0cm | 30 | 19 |
| 12 | 2 | SD01 | 弥生 | 甕 | 口縁部1/6 | 22.2 | 7.6 | | 浅黄橙 | 0.5～5mm大の長石・チャート・クサリレキ含む | 頸径18.2cm | 30 | 19 |
| 13 | 2 | SD01 | 弥生 | 甕 | 口縁部1/16<br>体部1/8 | 15.8 | 7.9 | | 浅黄橙～灰白 | 0.5～2mm大の長石・チャート・クサリレキ多く含む | 頸径12.8cm | 30 | 19 |
| 14 | 2 | SD01 | 弥生 | 甕 | 口縁部1/4 | 19.5 | 3.2 | | にぶい黄橙 | 0.1～0.5mm大の石英わずかに含む | 頸径16.4cm | 30 | 19 |
| 15 | 2 | SD01 | 弥生 | 甕 | 底部3/5 | | 4.8 | 5.4 | にぶい橙<br>～褐灰 | 0.1～0.5mm大の石英わずかに含む | | 30 | 19 |

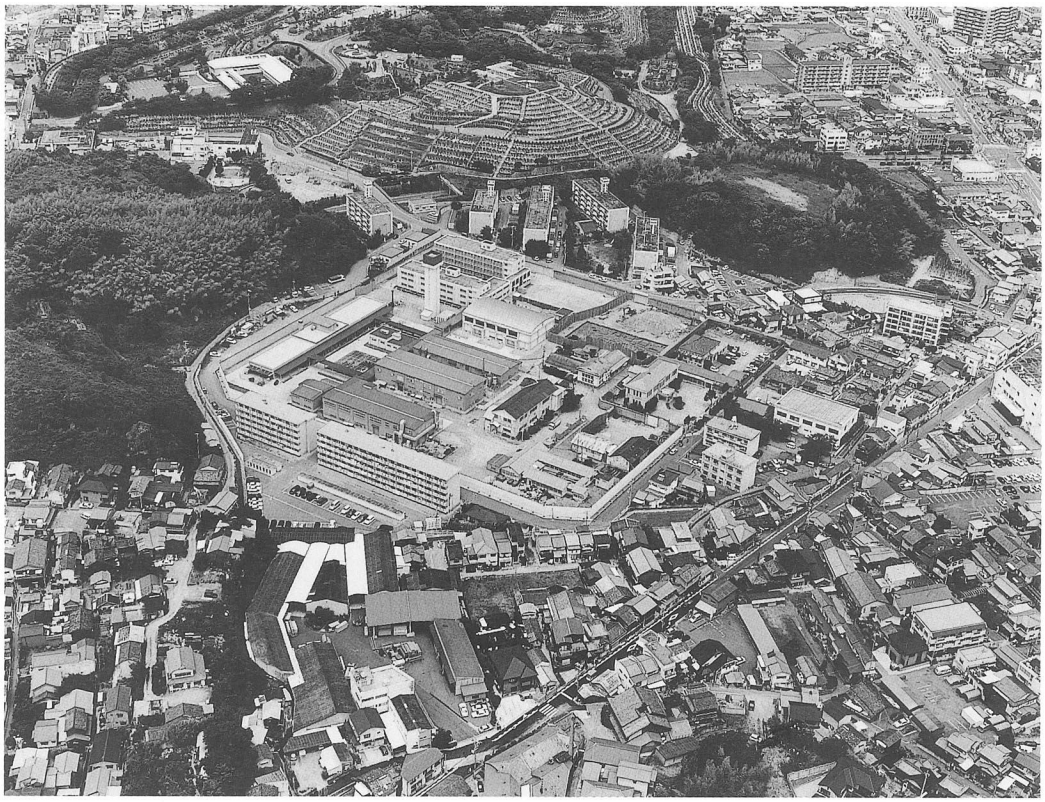
# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | いわばなちょういせき |
| 書　　名 | 岩端町遺跡 |
| 副　書　名 | 処遇管理棟・庁舎棟等新営工事に伴う発掘調査 |
| 巻　　次 | 兵庫県埋蔵文化財調査報告　第307冊 |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 山本三郎・山田清朝 |
| 編集機関 | 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 |
| 所　在　地 | 〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　　TEL　078-531-7011 |
| 発行年月日 | 西暦2006（平成18）年３月20日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| いわばなちょう<br>岩端町<br>い せき<br>遺跡 | ひょうごけん<br>兵庫県<br>ひめじし<br>姫路市<br>いわばなちょう<br>岩端町 | 28201 | 2000185 | 34度<br>50分<br>28秒 | 134度<br>40分<br>49秒 | 平成12年５月９日<br>～６月13日 | 859㎡ | 処遇管理棟<br>新営工事 |
| | | | 2003190 | | | 平成15年11月26日<br>～12月26日 | 617㎡ | 庁舎棟等<br>新営工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 岩端町遺跡<br>第１次調査 | 集落跡 | 弥生時代中期後半 | 掘立柱建物跡<br>溝・土坑 | 土器<br>サヌカイト製石鏃 | |
| | | 古墳時代初頭 | 土坑 | 土師器 | 土器内面に炭化米付着 |
| | | 平安時代後期<br>～鎌倉時代初頭 | 溝 | 土師器 | |
| 岩端町遺跡<br>第２次調査 | 集落跡 | 弥生時代中期後半 | 溝 | 土器 | 生駒西麓産土器 |
| | | 平安時代後期<br>～鎌倉時代初頭 | 掘立柱建物跡<br>溝・土坑 | 須恵器・土師器 | |

# 写　真　図　版



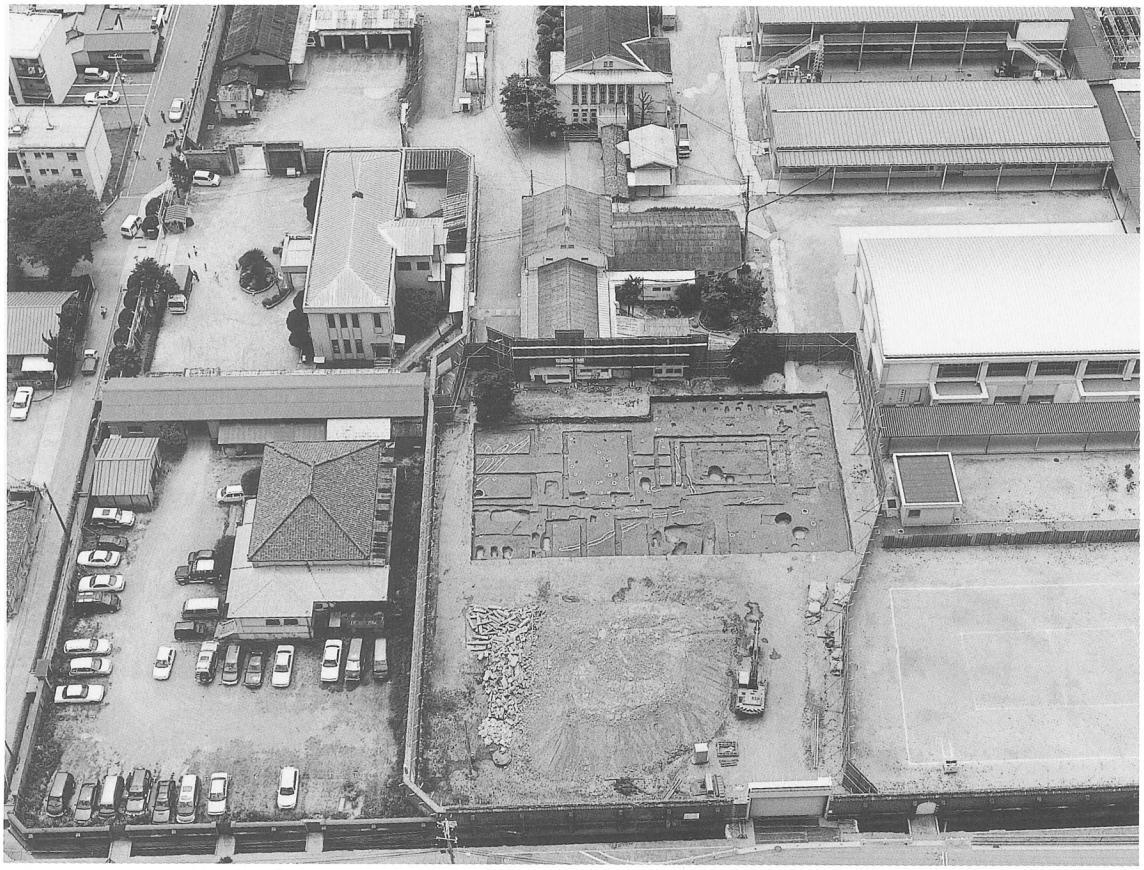
## 写真図版 1　岩端町遺跡

米軍空中写真
（昭和 21 年～ 23 年撮影）

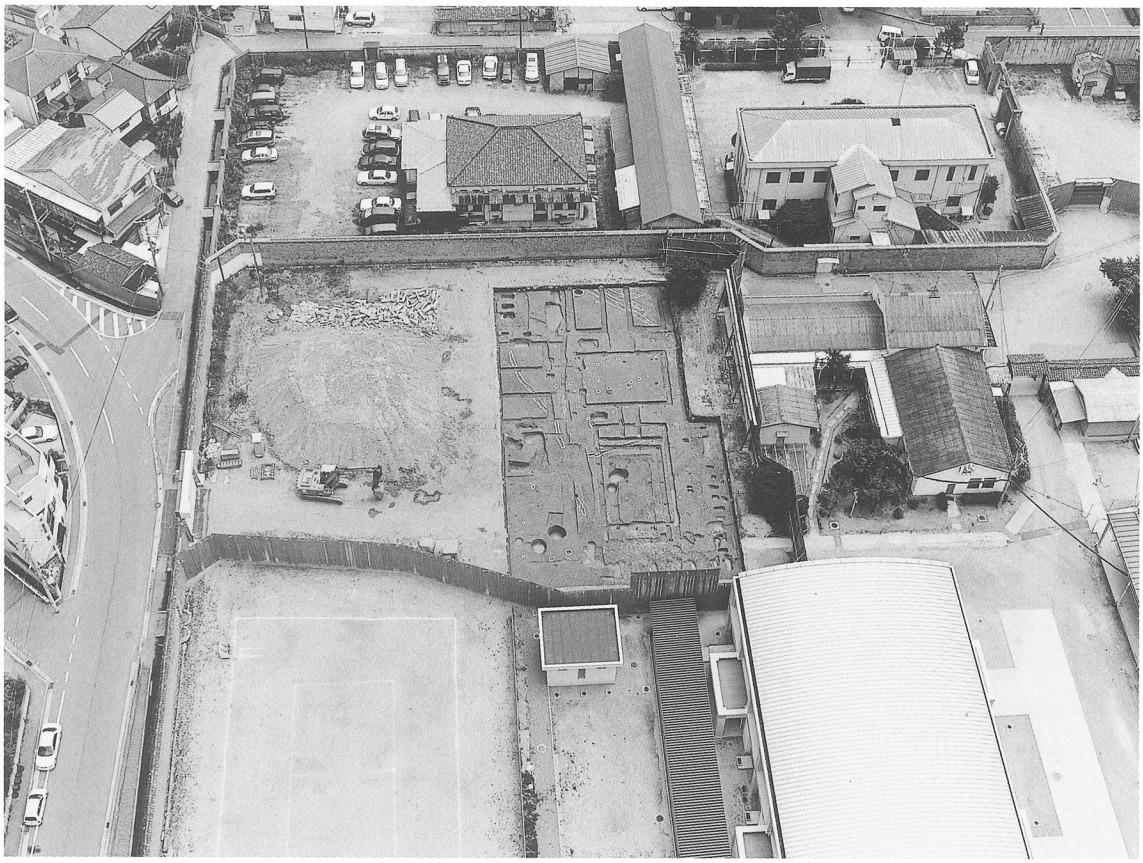
遺跡遠景
南上空から

遺跡遠景
北東上空から

## 写真図版３　第１次調査

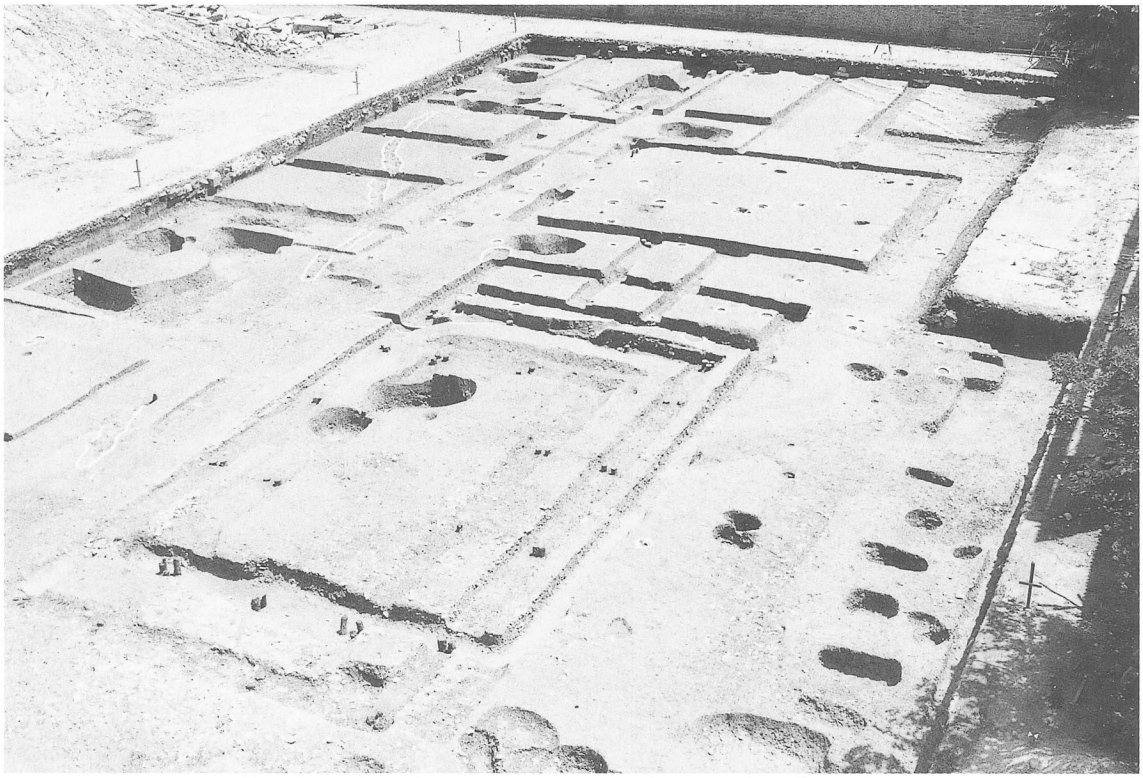


全景　北東上空から

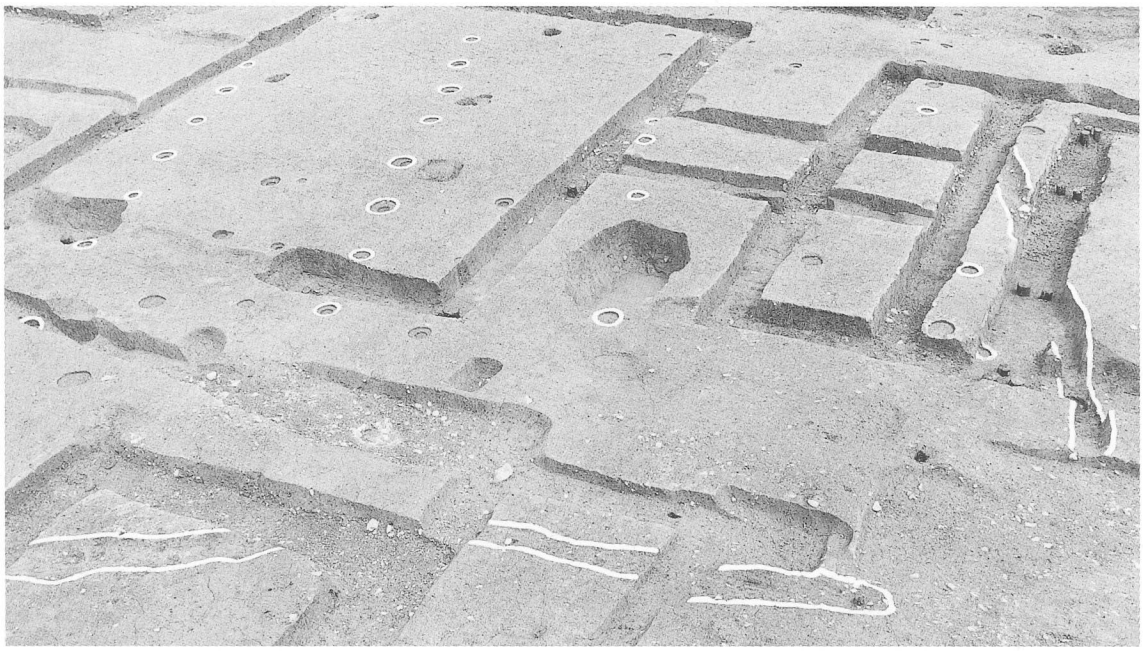


全景　北西上空から

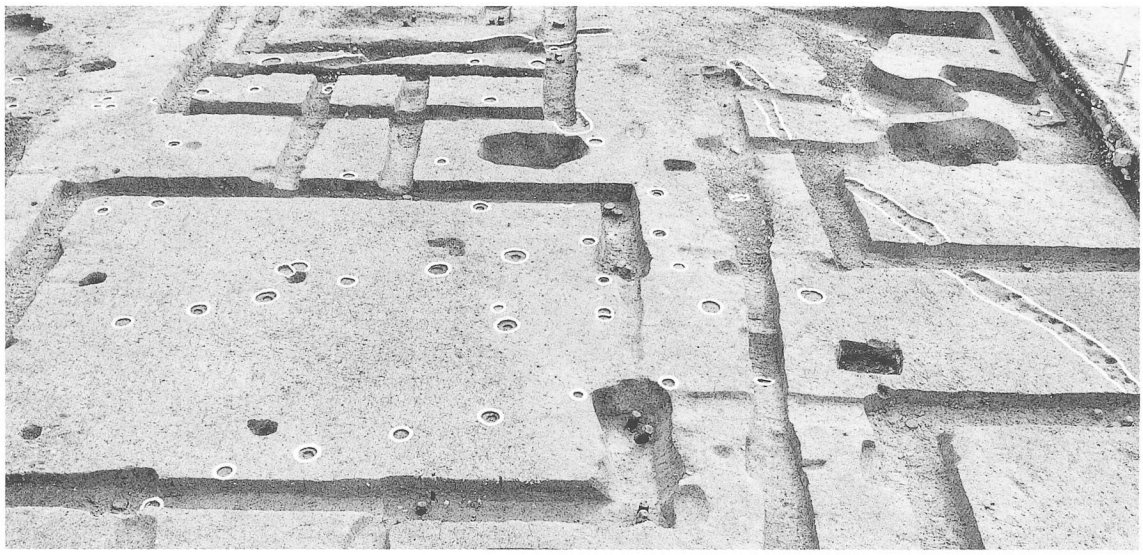
全景　真上から



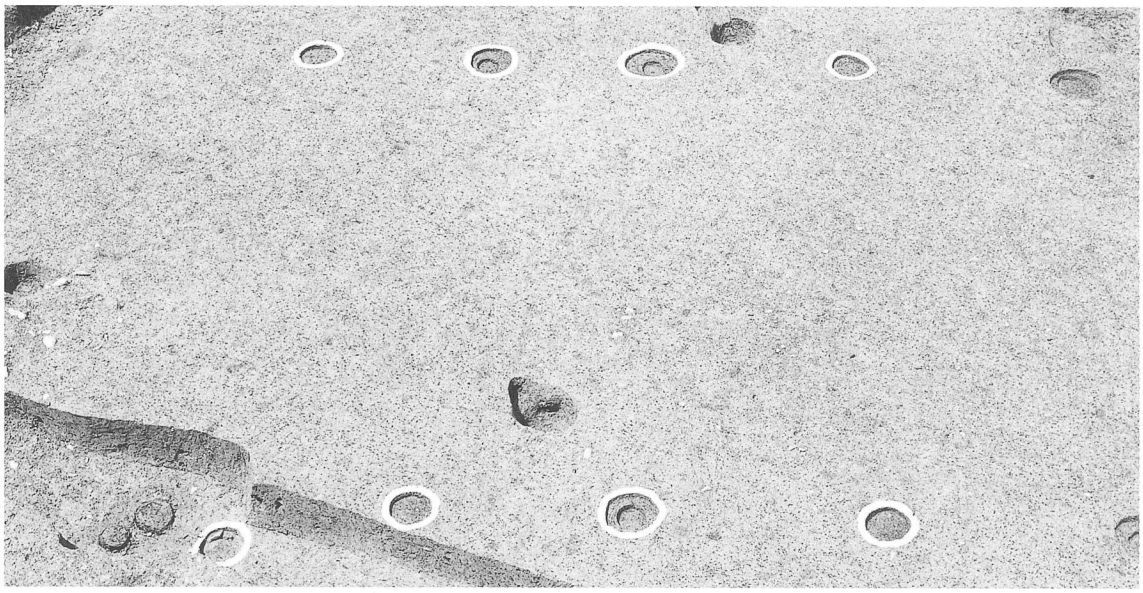
全景　南西から



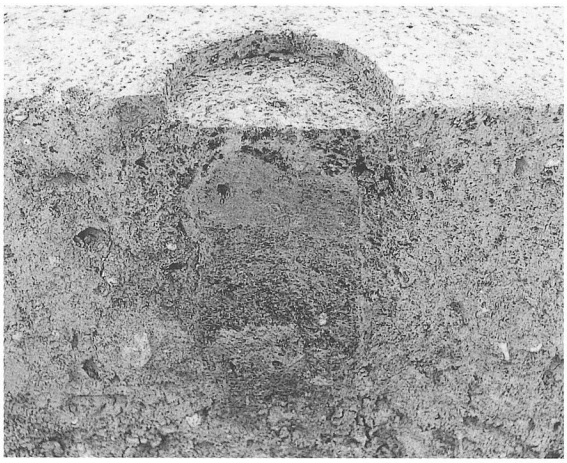
建物群　北西から

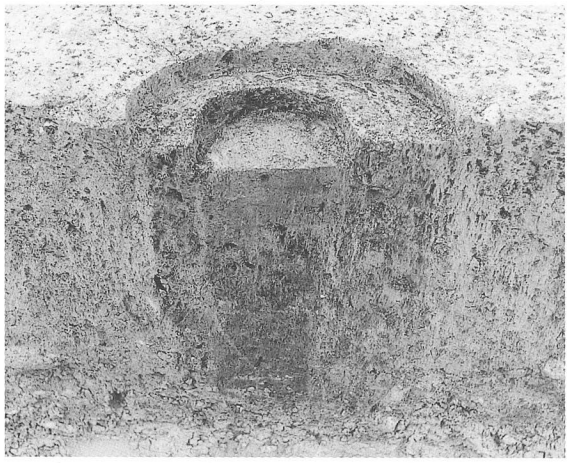


建物群　北東から

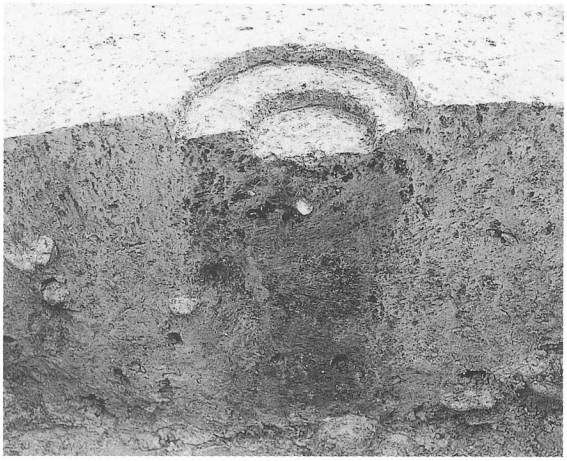


SB01　北東から





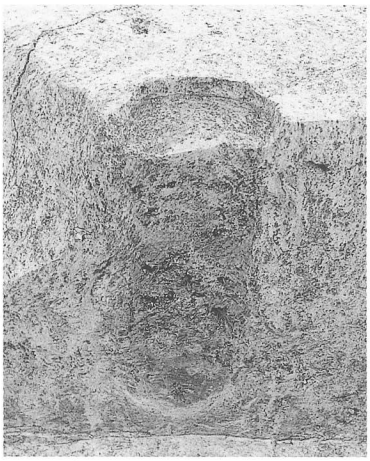
（左）SB01－Ｐ１
南から
（右）SB01－Ｐ２
南から



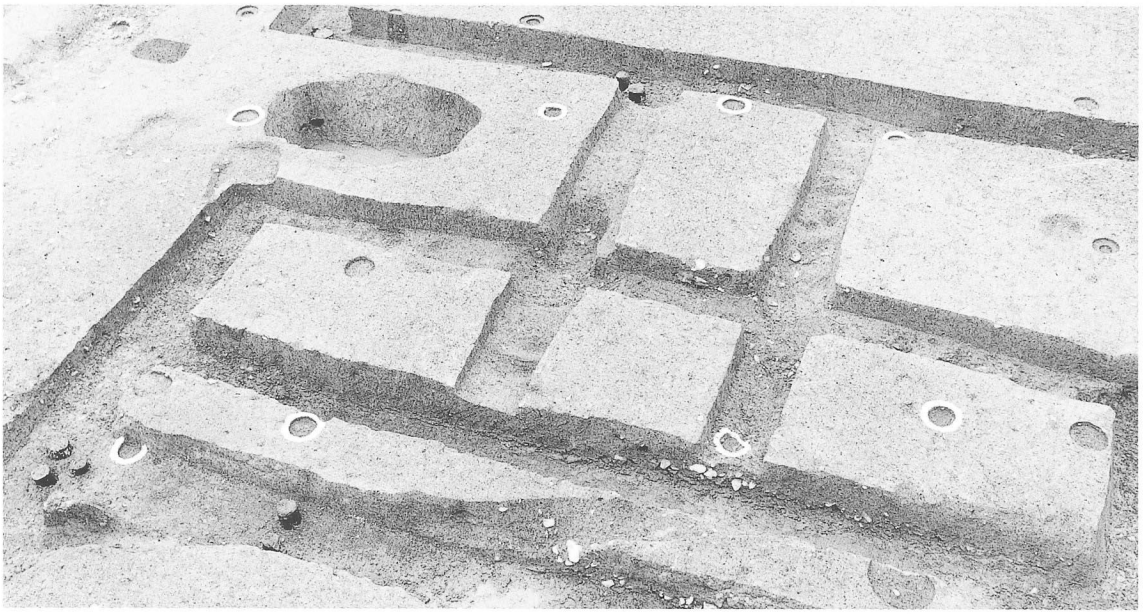
（左）SB01－Ｐ３
南から
（右）SB01－Ｐ４
南から

（左）SB01－Ｐ７
北から
（右）SB01－Ｐ８
北から

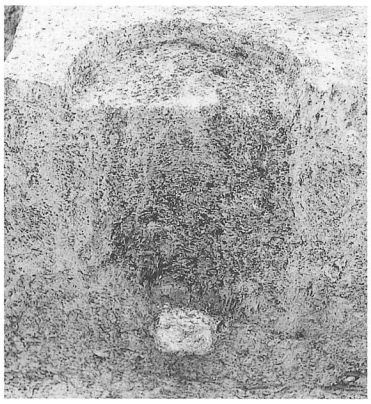
SB02　北東から



（左）SB02- Ｐ２
北から
（中）SB02- Ｐ３
北から
（右）SB02- Ｐ４
北から

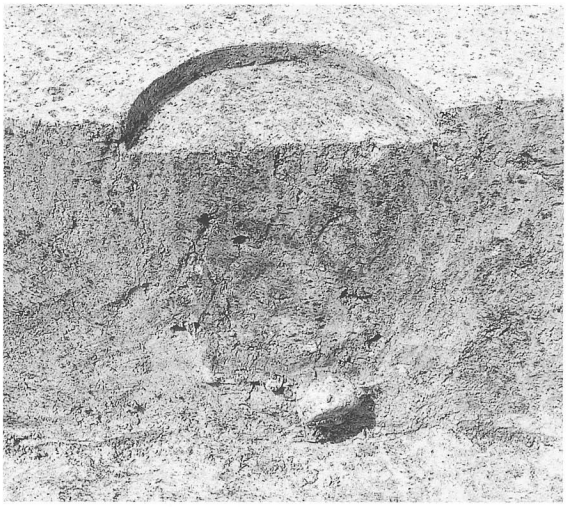


SB03　南西から

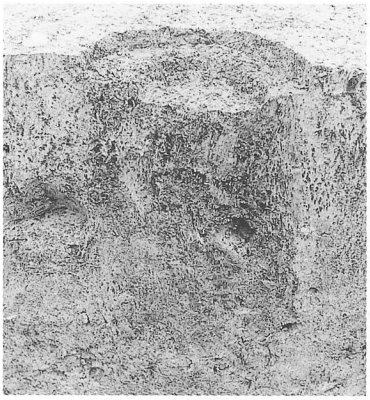


（左）SB03- Ｐ１
北から
（中）SB03- Ｐ２
北から
（右）SB03- Ｐ７
南から

SB04　北東から



（左）SB04- Ｐ２
北から
（右）SB04- Ｐ３
北から

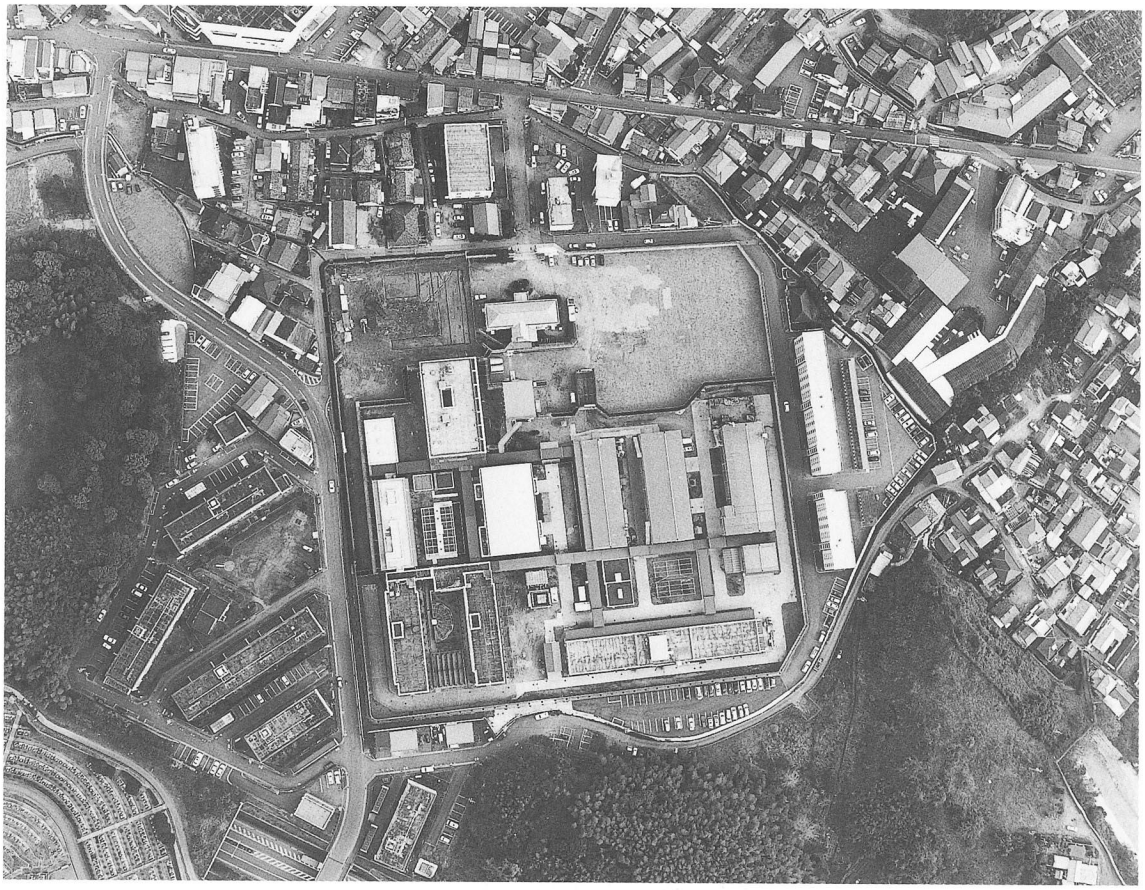


（左）SB04- Ｐ５
南から
（中）SB04- Ｐ６
南から
（右）SB04- Ｐ７
南から

SK03 断面　南西から

SK03　土器出土状況
南西から

SD02 断面　西から



全景　西上空から

全景　北上空から

全景　真上から

東側の遺構　南から

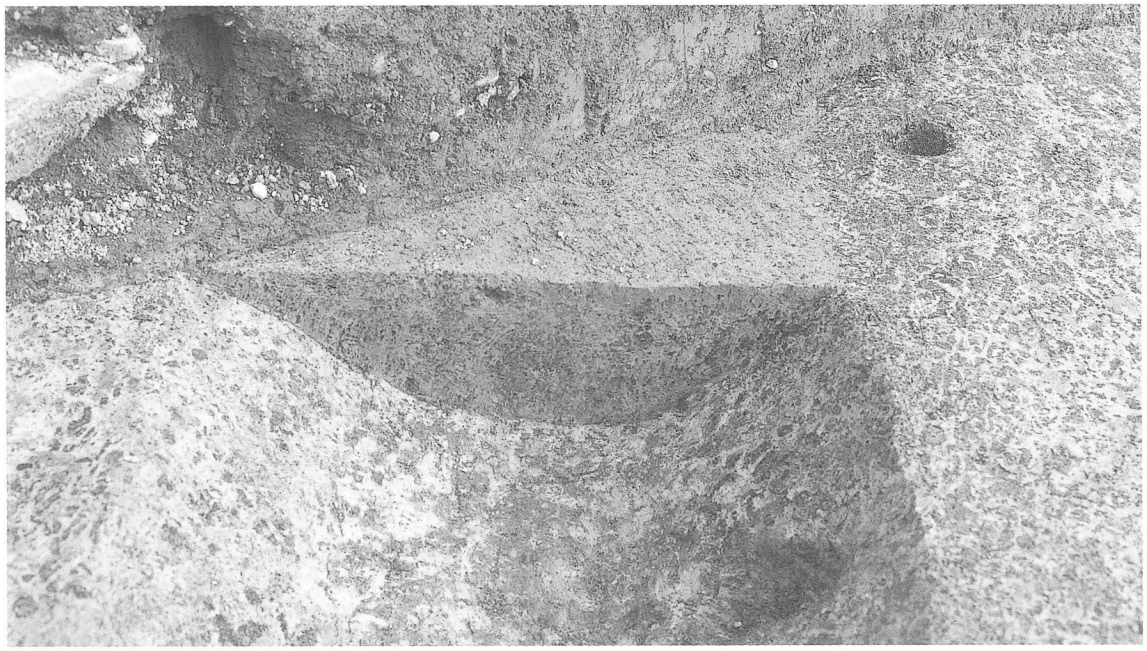
SD01 ～ SD03
東から

SD01・SD02
東から

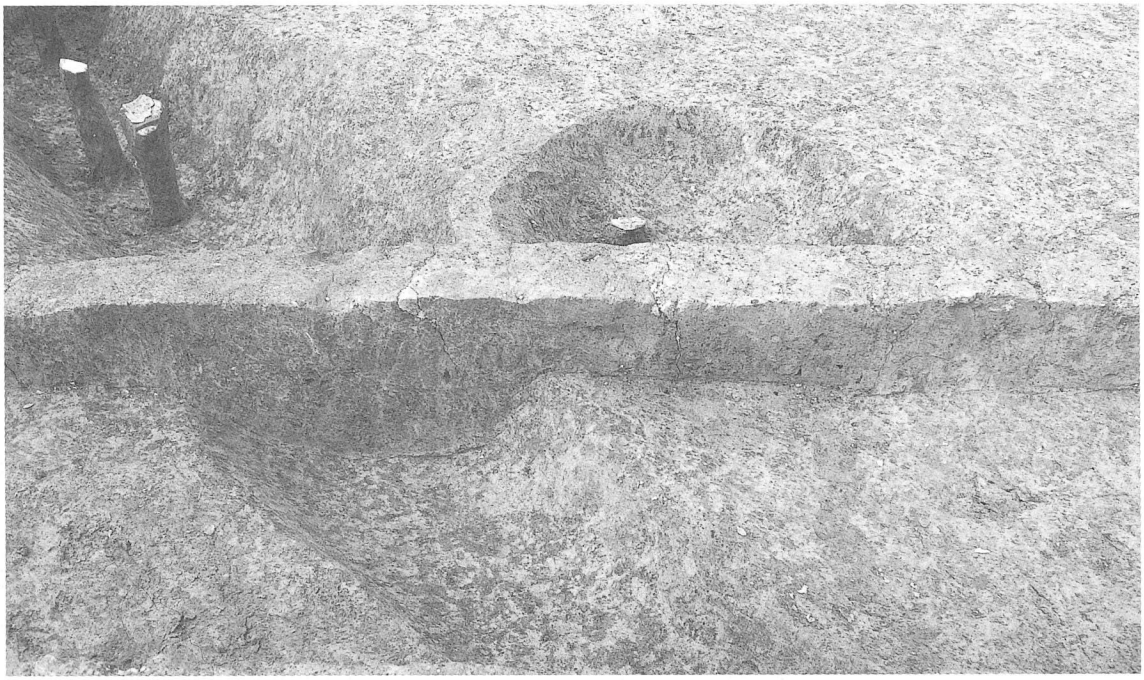
SD01 遺物出土状態
北西から

SB01　西から

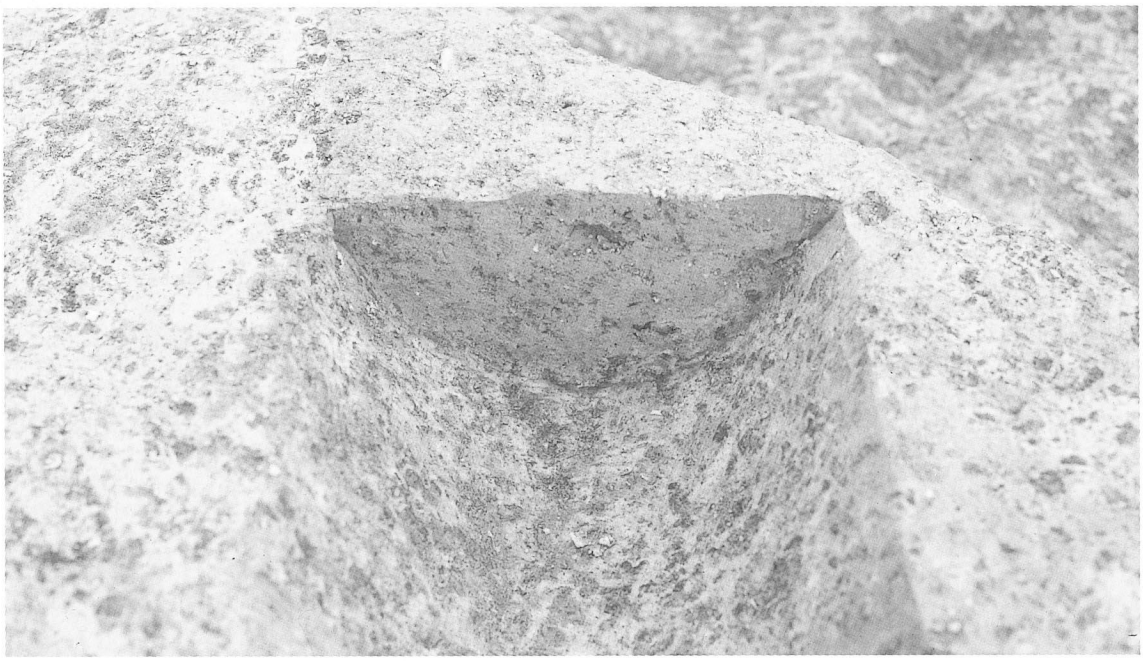
土坑群と溝　北から



SD01 土層断面
北西から

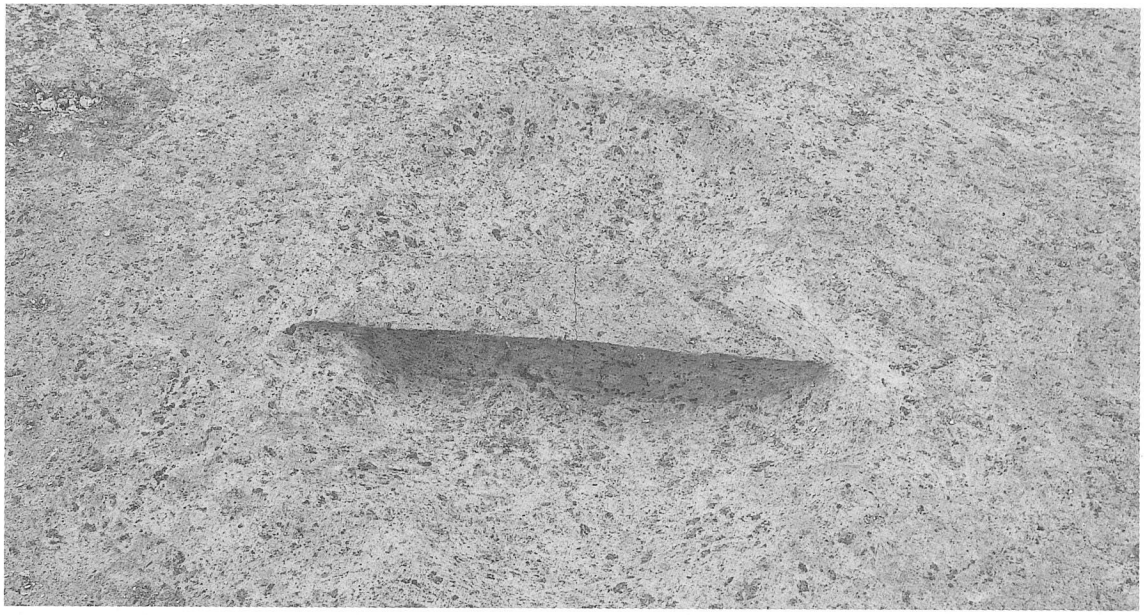


SD01 と SK05 の
土層断面南から

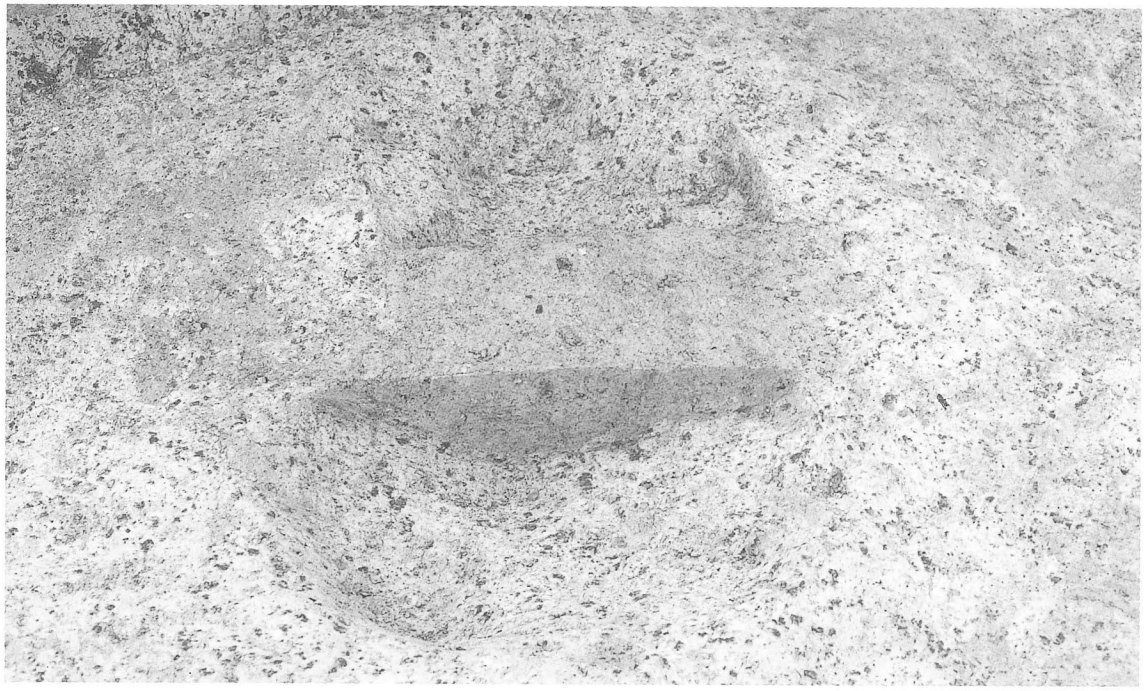


SD03 土層断面
南から

SK01 土層断面
南から

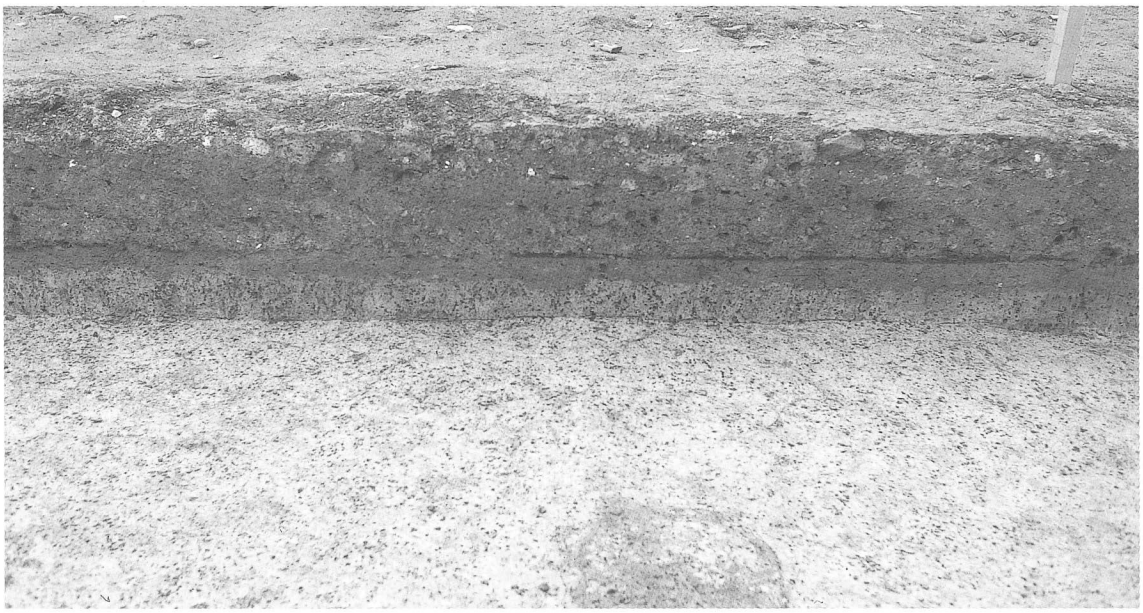


SK03 土層断面
東から

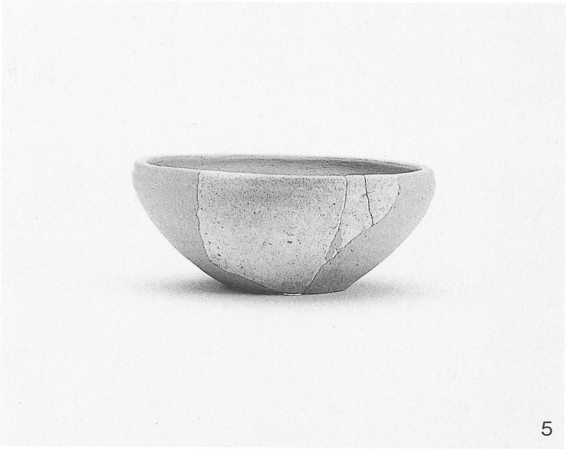


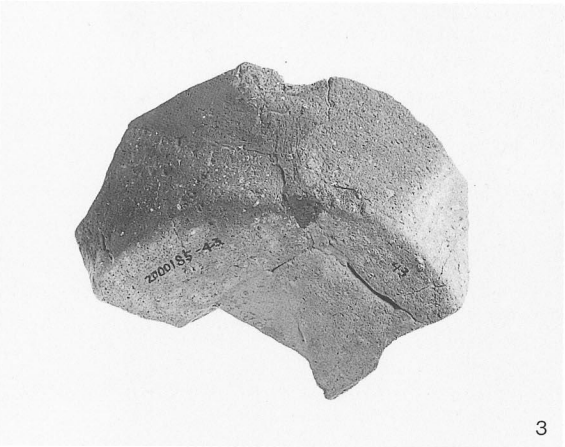
SK04 土層断面
北から

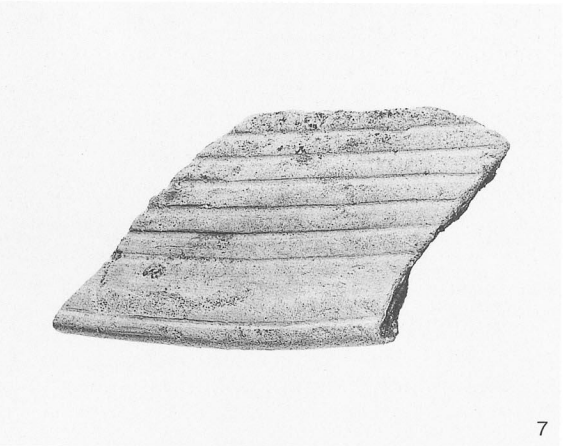
SD01 と SK05 の関係
西から

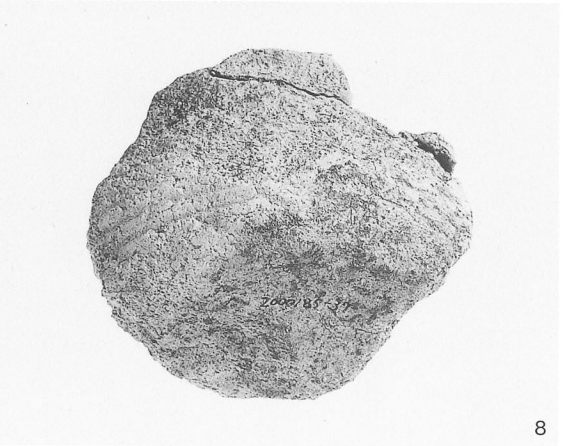


南西壁土層断面
北から





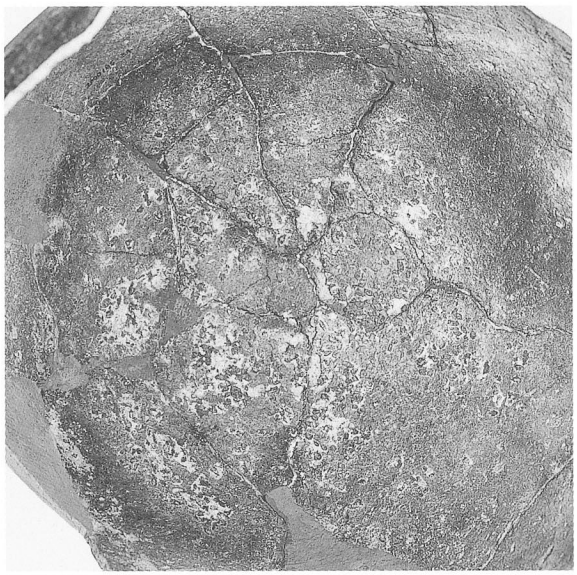



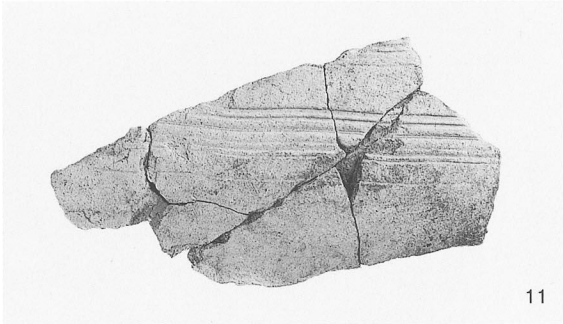


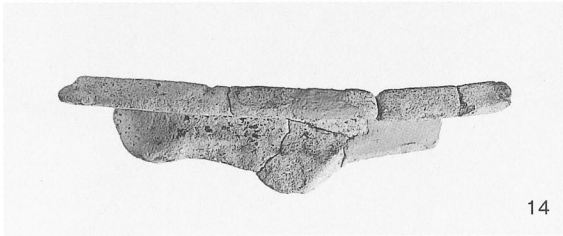

SB02 出土土器（1・2・6）　SB03 出土土器（4・5・7）　SD02 出土土器（8）

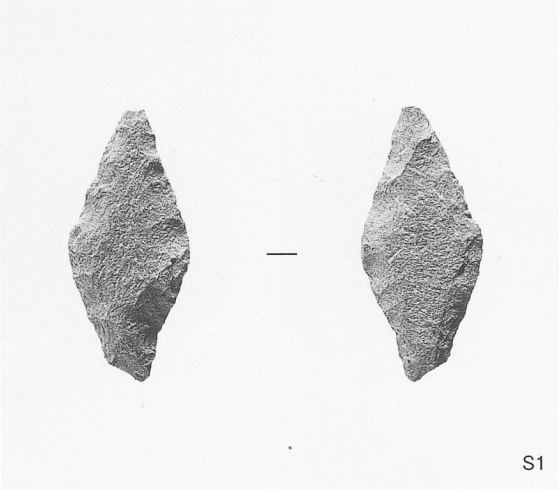
第 1 次調査包含層出土土器（3）

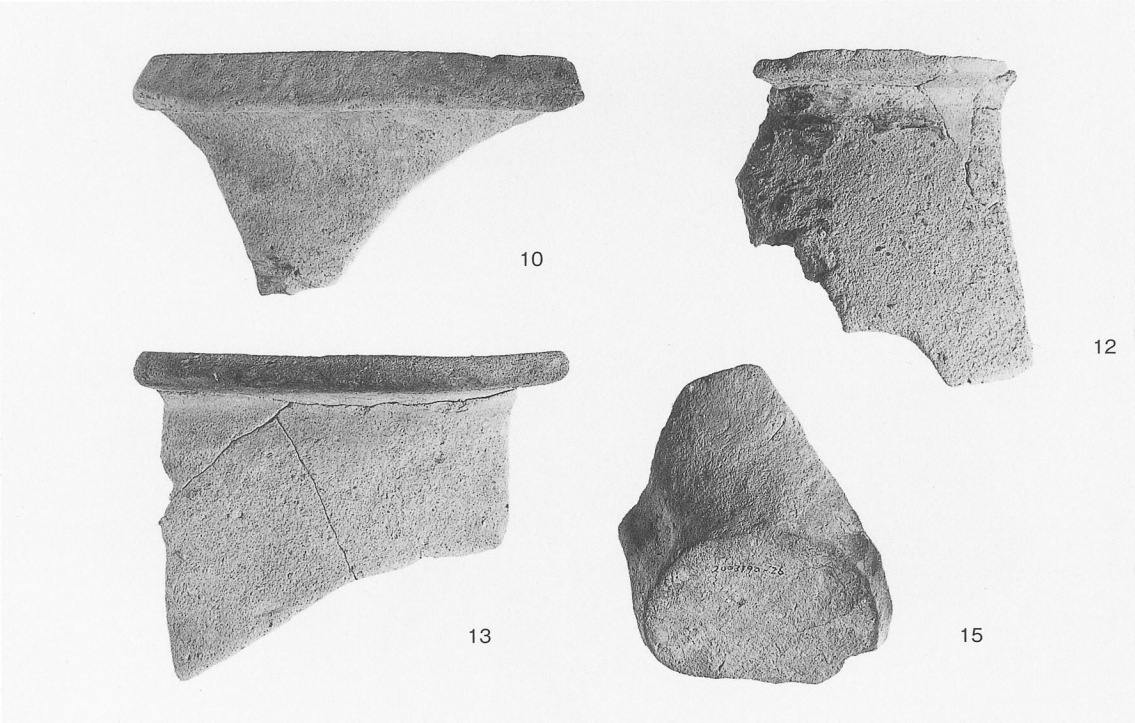
## 写真図版 19　出土遺物（第 1・2 次調査）








SK03 出土土器（9）　第 2 次調査 SD01 出土土器（10 ～ 15）

第 1 次調査出土石器（S1）

兵庫県文化財調査報告　第307冊

# 姫路市　岩端町遺跡

## ― 処遇管理棟・庁舎棟等新営工事に伴う発掘調査 ―

平成18年３月20日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５

発　行　兵庫県教育委員会

〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10－１

印　刷　ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39